江戸名所図會

五

ル 4
5105
5

門ル4
號5105
巻5

河崎六郷渡口より向の方よりあるを東海道官驛の一つにして

行程品川よりも二里半驛舍數百軒整くとして両側より聯る

（小田原北条家の所領役帳より雉田新三郎及び伊勢兵庫頭、間宮豊前守等此所領の中より此河崎の地名あり又同書大珠寺分十九貫四百文の内五百文を川崎より代とあり）

平安記行　河湾より海へ流れ寄る使なとあるやそこそこ

（八長光寺日耀上人くらの称佛ふるせて馬むんと立るのもふ洲崎ふかくきのなそうれハ）

行朗　雲うるおるも河湾ふ泛とみるところの白雲　持資

ひさしくいふ所ふ

かとめるるひさしの里をそれハ色ふ沖津洲風　仝

（按ふ長光寺ハ恐らく廃寺となりあんを砂ふといふて此驛中の小地名ハ今も久根崎町新宿砂子町小土呂町等の名あり）

河崎庄司次郎高重宅地　其舊地今ハ高重昔渋谷ふ住を後違論のるあるく此地へ移り住となり又旧地堀内小

山王の祠をも此河崎ふ迁をとのへる

河崎万年屋
奈良茶飯
万年

按ずるに今河崎の驛舍の南より堀の内と字する地あり〻山王権現の社あり疑ふらくは高重渋谷より迂路を求めの御神なりんを祭れども次の山王の社地なる〻ハ其趣尤違へり又此ハ堀の内と称せるも高重の旧館の地なるへれとも土人心こゝを詳ならず他日考へきのこと

堀内山王権現宮　河崎上新宿街道の中程より左へ入る二丁許南にあり相傳ふ　欽明天皇の御宇勧請せりと河崎の鎮守ゆゝ〻神領ある　社司　鈴木氏奉祀せ　鈴木氏祖先ハ三郎高重と〻熊野の鈴木氏より

本社　祭神武甕槌命　相殿　経津主命　菊理媛　伊弉諾尊　伊弉冊尊　五神合祀せ

四月三日　流鏑馬神事ひらる六月十五日ハ大祭ゆゝ〻十三日より十六日に至る大ふ賑へる其間渡田邑の海濱にある所の旅所へ神幸あるに　焼う森と号く御洗池あり其傍に弁天の叢祠あり又同書に長八丁の馬場あり新田家より寄附ありしと云傳ふ　土人云此御洗池より出る魚ハ眼なしと　十五日神輿渡御の時前へ神幣七柄を持せる相傳ふ弘安四年川畑櫻川左近助と申す人勅を奉り奉幣使とゝ〻当社に向ふ〻頃の幣串なりとゝく当社第一の

神寶とす　奉幣使の人名ハ尤不審ひらく記もの只傳聞のまゝ

又九月十九日ゆゑ角力の伎を奥形ゝ十一月廿三日ハ年の市立る

按ずるに同所佐〻木明神の社記に佐〻木四郎高綱頼朝公の命を蒙り河崎山王宮の社造営奉行ゝと云ふを載せり当社のことをいふなるへし

洲河原桃林　河崎渡口より大師河原迄の間ゆゝ〻田園悉く桃樹を栽ゝ故に開花の時に至りハ紅白色を交へ〻奇観ゝ

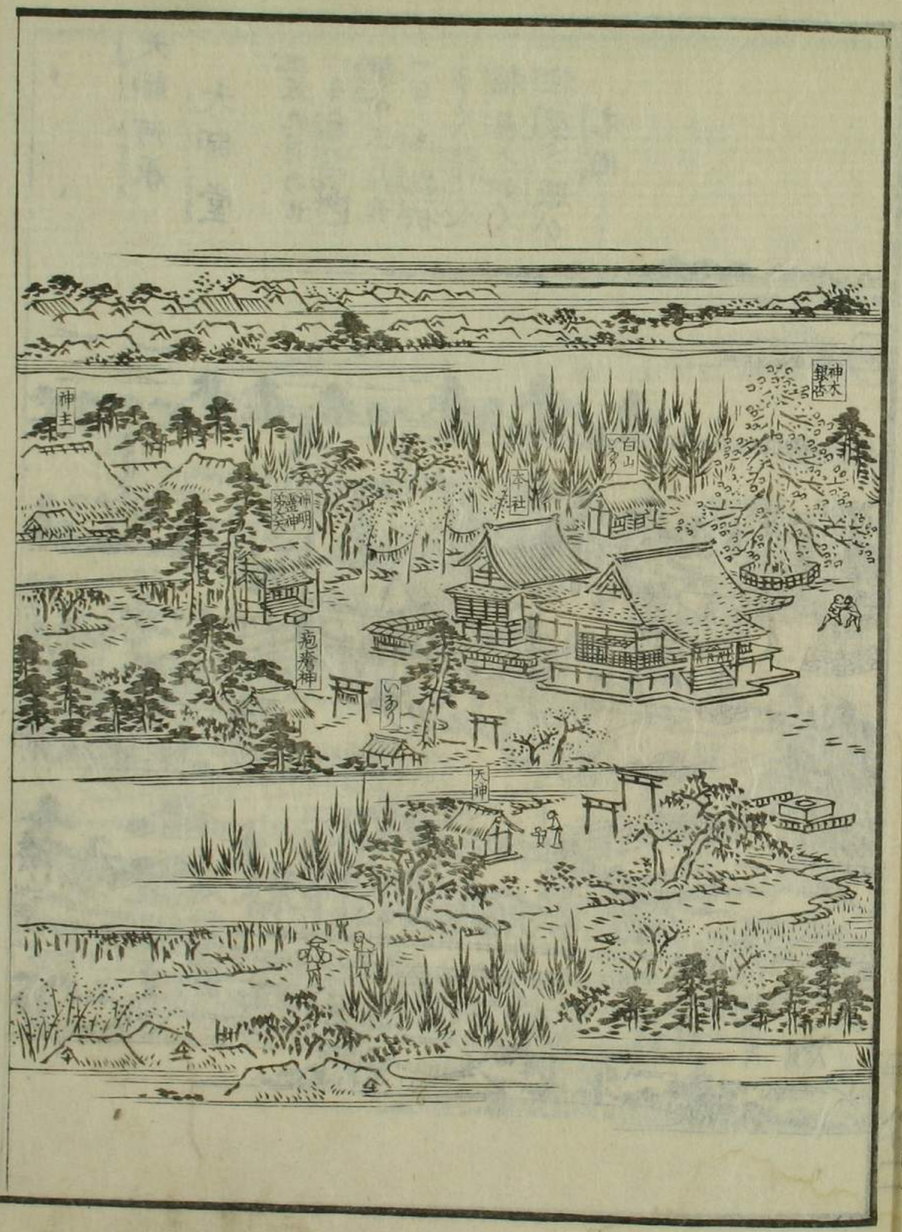
除厄大師堂　大師河原にあり金剛山平間寺金乘蜜院と号ス

真言宗ゆゝ〻醍醐三宝院に属せ　当寺に安置せ〻大師の霊像ハ大師河原と号ス永禄二年小田原北条家の所領役帳に行方与次郎といふ人此地を領せとあり　此地より出現あり〻故にその地を

弘法大師像　弘法大師の真作ゆゝ〻海中より出現あり〻ゆゑ佛體悉く貝殻相着てあり

額　金剛山　石川李亮頼直筆　客殿に平間寺と書せ〻も同〻人の書なり

六字名號石碑　堂前左の方にあり石面中に南無阿弥陀佛とあり〻傍に寛永五年三月二十一日雪翁月盛居士と注〻花押を印せり碑陰に武州江戸京橋紀伊國屋櫻井又太夫三月二日御霊夢の所六郎大橋ゆゝ〻太師の御筆を蒙り此名号法名雪翁月盛居士万人に愚筆を深く

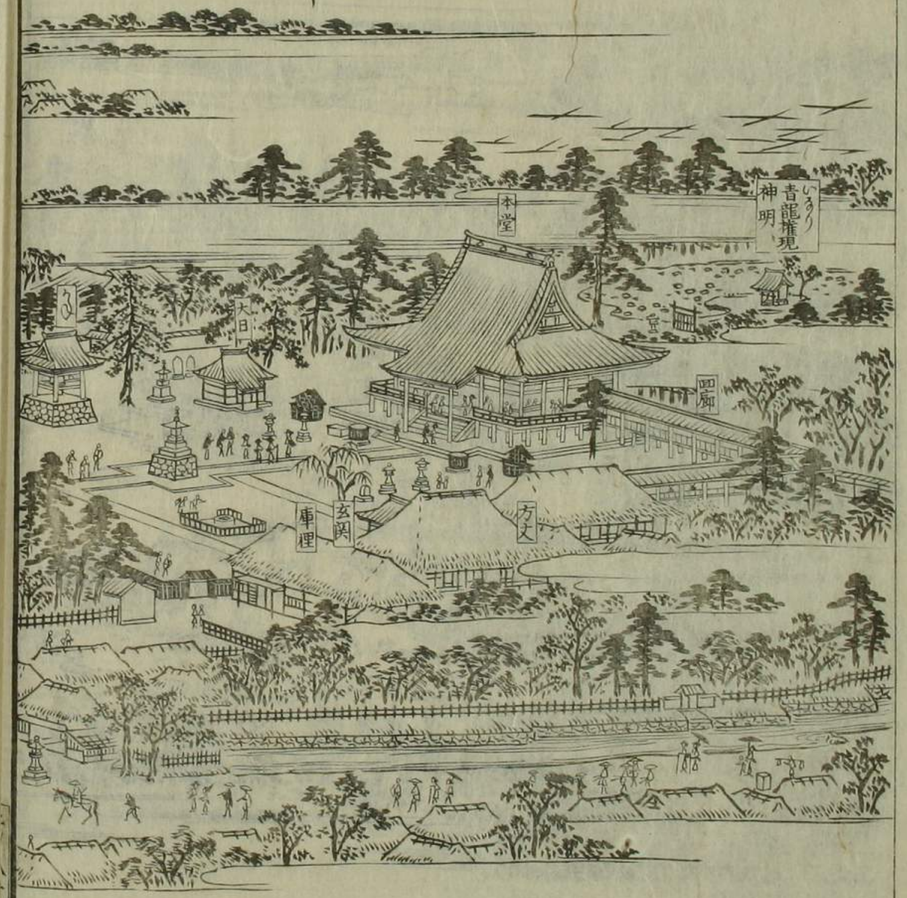

神主
神大
鉄造
白山
本社
神明
遠神
天天
疱瘡神
いろり
大神

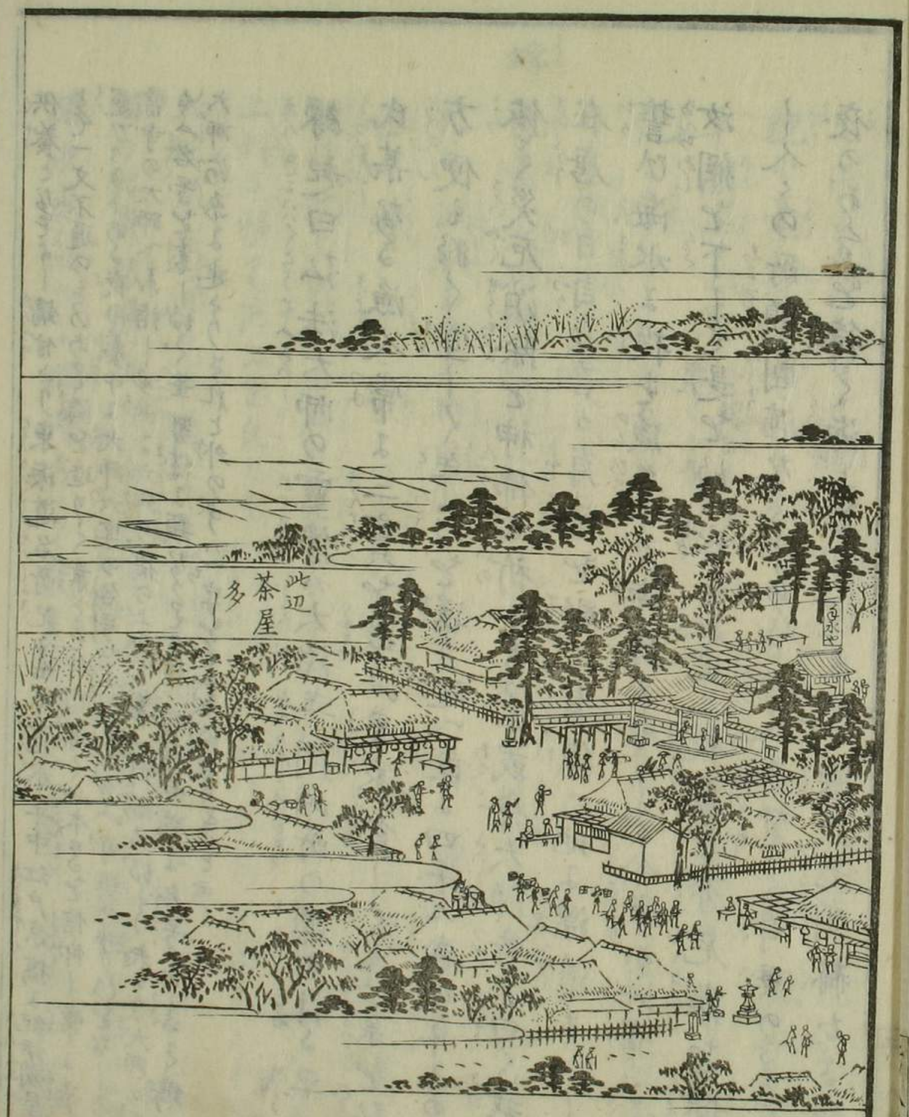
河崎山王社
行天

大師河原

大師堂

正五九月の廿一日祭詣多
就中三月廿一日八ツ時影供
あく詣人
稲麻の如く
往還の賑ひ
尤殷し





供養となせり〜鐫付う東海道名所記ニ云く寛永年中江戸京橋ニ紀伊國屋作内
とて一文不通のものあり酒を造りく業とも作内深く此本尊を信仰し常ニ歩戦
運ひ々るゝ小ある夜の夢中ニ大師六字の名号を書教へ奇異のゆゑなしある日
當寺の大師へ参詣し始めて六郷の橋の上ニて筆一對拾ひ始めて大師の教へ
ゆゑ名号を書し始く筆勢体ニ類なるもれハ作内石塔ニ名号を書く鐫つけ
大師河原ニ建うされと外のものハ一字をも書給さりきと云〻

縁起曰弘法大師の霊像ハ大治年間此所の浦ニ住る平間
氏其なる漁人常ニ三寶を敬み其家貧しく産業を弘ん
方便も乏く空しく年月を送り迎へ既ニ四十二歳の年ニあり
依く災厄消除を神佛ニ祈るに或夜大師告く曰く我昔
在唐の日自ら吾ゝ肖像を彫し有縁の地ニ漂着せへしと
誓ひ海水ニ投じ後久しく海底ニありしゝ今幸ニ此浦ニ止る
汝網を下して是を始ハ永く此地ニ化益を布厄難を除滅
し人〻の所願圓満なるべしと漁人夢覚く奇異のゆとし
夜のあけるを待く海上を見渡ニ一條の光明赫たるひの
所ニ舟を寄せ網を沈降ニ果しく夢中ニ見るあた容
貌小毫釐も違ハる大師の霊像を得うり仍く一字を創立し
平間寺と号平間氏の号を雨来已降霊應著く常ニ詣人
絶るなし〜正五九月の廿一日別く三月二十一日ハ御影供修行
あるゆゑ大ニ賑ハつて

蜂

龍盃　大師河原村池上氏の家ニ蔵せり往古慶安年間此地ニ
於く酒戦あり〜時用ひうり〜盃ゆ〜く酒七合餘りをとうるると云
盃中蜂と龍と蟹との象を描金ニせり　蜂ハさし龍ハのむ蟹ハ肴を
相伴池上氏ハ小田原の北条家ニ属し仕ふ小田原落城の後池
上村ニ移り池上を氏とせ　後今の地へ此家ハ水鳥記ニ云えし酒客
大蛇丸底深ゝ末裔なり　底深通称を池上慶安元年八月江戸大
塚の地黄坊樽次　茨木春朔と称せ春朔のゆゑ系四巻小石川祥雲寺の下ニ住せり此底深ゝ家ニ至り
樽次底深共ニ酒将となり数多の酒兵を集め献身方と分れ

假ま一の法令を立て犬居目礼古佛座等の名を設けて酒量を
様さんとく大盃を執く勝劣をろろ月を吟く戯れとせしとせるハ
水鳥記ま詳なり　此書江戸と京都との二本あり共に伊勢屋も刊本に揚次
自ら著せし　又此家ま酒戦の時酒徒ま示せる制札あり　闕損
戯編なり　今ろ月ふ其半を存せり揚次の書なりとく墨の跡くなりく古色疑ふべ
されと文水鳥記ま出る所と少く異なり　序ま連る酒客の名左のし

六位大酒官地黄坊樽次　江戸大塚住
毛藏坊鉢呑　同赤坂住
佐藤權兵衛胸赤　同小石川住
鈴木半兵衛飲勝　同船町住
名護屋半之丞盛安　同浅草住
木下李兵衛飯嫌　同冨坂住
三浦新之丞樽明　同麻布住
佐々木五郎兵衛助呑　武州八王子住
同弥左衛門酒丸　南河原住
松井金兵衛夜久　大師河原住
齊藤傳左衛門忠呑　蕨驛住
喜太郎醒安　同川崎住
半舟坊數呑　同菅村住
小倉又兵衛久　同住
佐保田酔忠

来見坊樽持　相州平塚住
甚鐵坊常赤　同鎌倉住
以上十七人

大蛇丸池上太郎右衛門底深　武州大師河原住
池上長吉底成　底深長男
同百助底平　同二男
同左衛門底安　同舎弟
同七郎左衛門底廣　同舎弟
同左太郎忠成
四郎兵衛底廣
山下作内請安
藪下勘解由左衛門底深　従弟
竹野小太郎豊呑　武州稲荷新田住
同弥太郎數成　江戸赤坂住
朱倉八左衛門吐次
田中内徳坊呑久
朝服九郎左衛門捕呑
同を九二郎常佐
以上十五人

末廣松　稲荷新田石渡氏の門辺よりあを此石渡氏も水鳥記ま
酒徒く四郎兵衛底廣といふる人の末なり　昔を

庭中林泉の儲拵ありく橋の傍より下戸の輩渡るを注せ〜制札を建こりしとなり酒客宴飲の旧跡なる此松も底廣う愛樹ゆゑ末廣と名つけしとも此家ゆゑ酒戦の頃用ひしとも大盃あり酒七合を入る盃中金泥描金せし猩々の形を箱の蓋よ水鳥底廣盃と題し又左の如く狂歌句を注せり

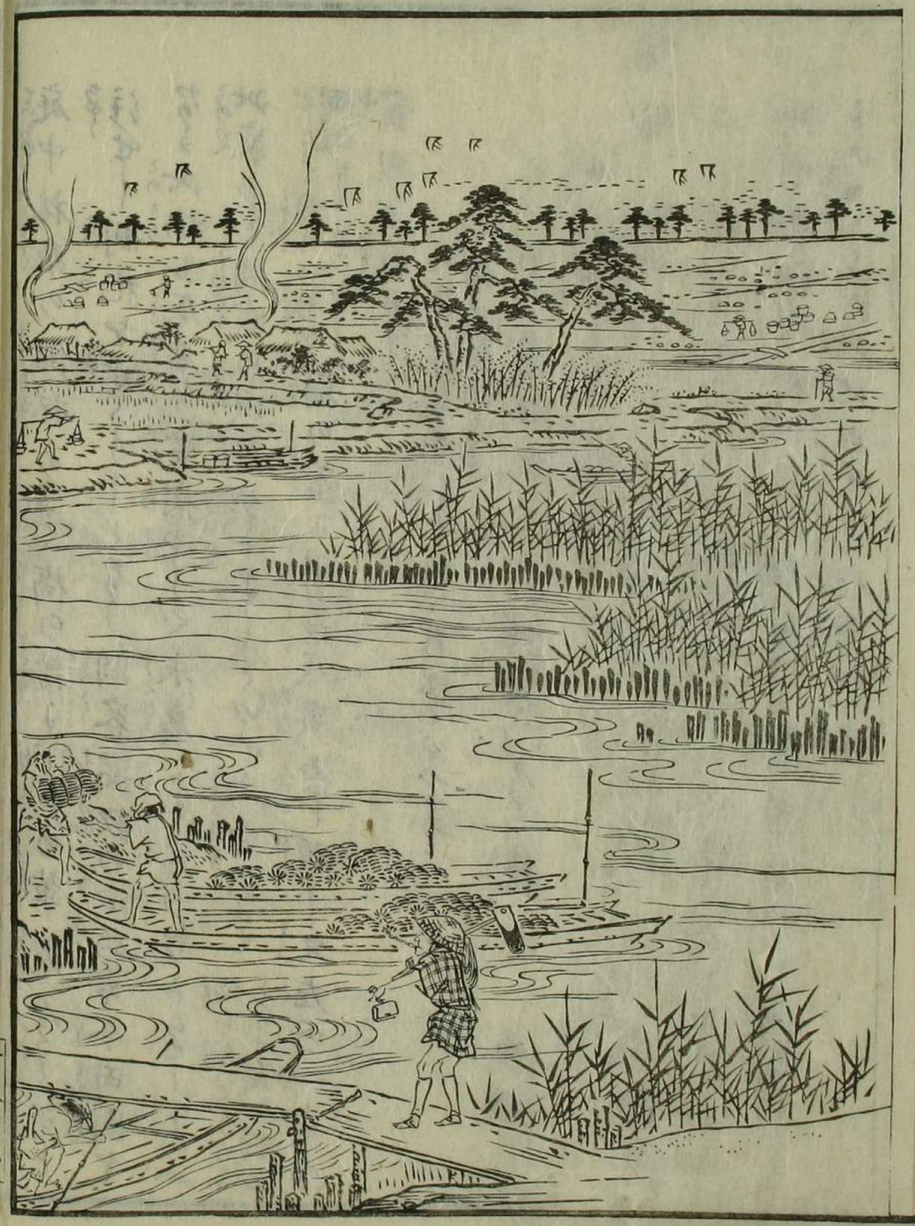
大阪江戸あそび移沢といふもの
孫よあのうり

夢や西瓜上戸酒も乃猩　沾圃

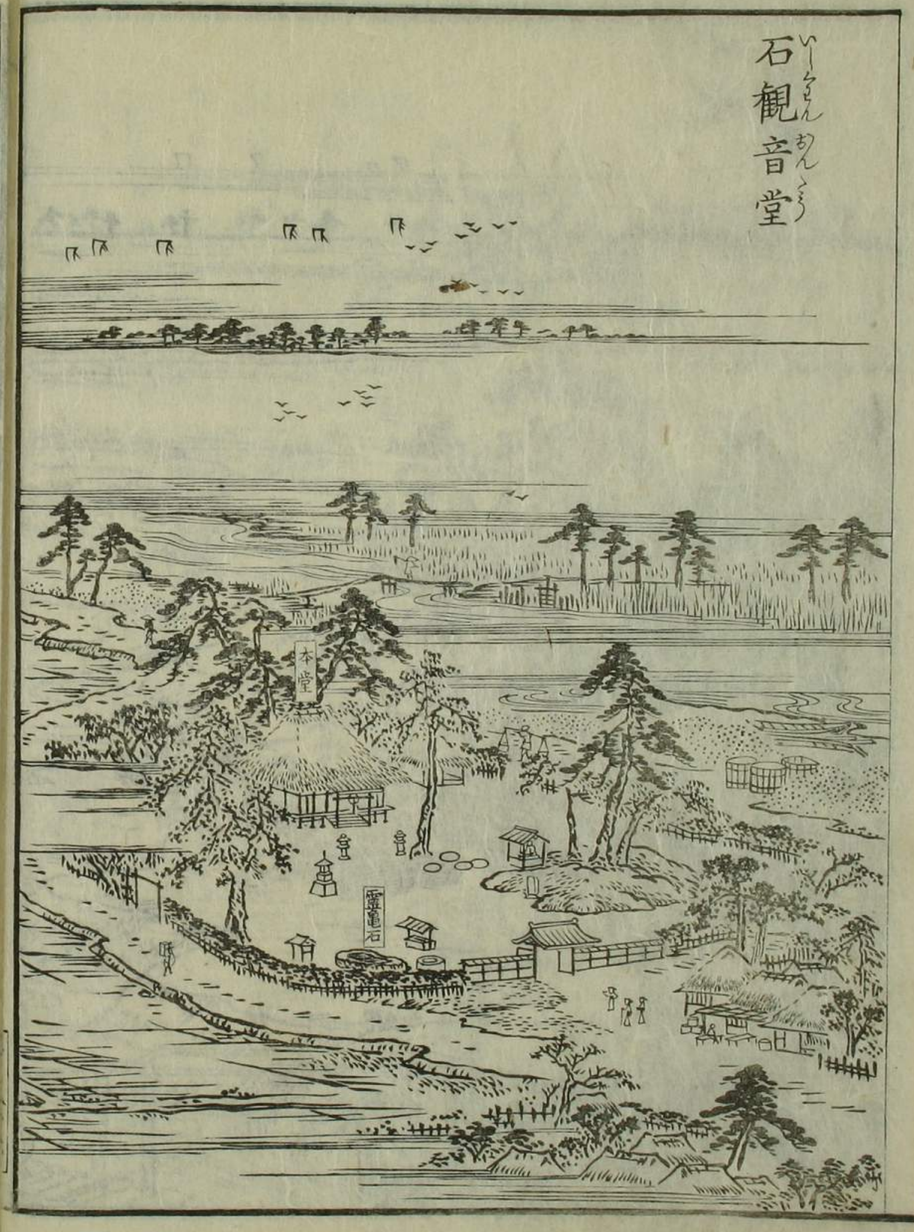
按ずるに底廣を移沢といふ

鹽濱　同所南の方北海濱なり　寛文九年己酉叶栄雲
及ひ泉市右衛門といふる者開初ると云依く今も大師河原
川中島稲荷新田等の村〜塩を製せるを以て産業とする
その少〜此地風光甚佳景なり

河崎
汐濱

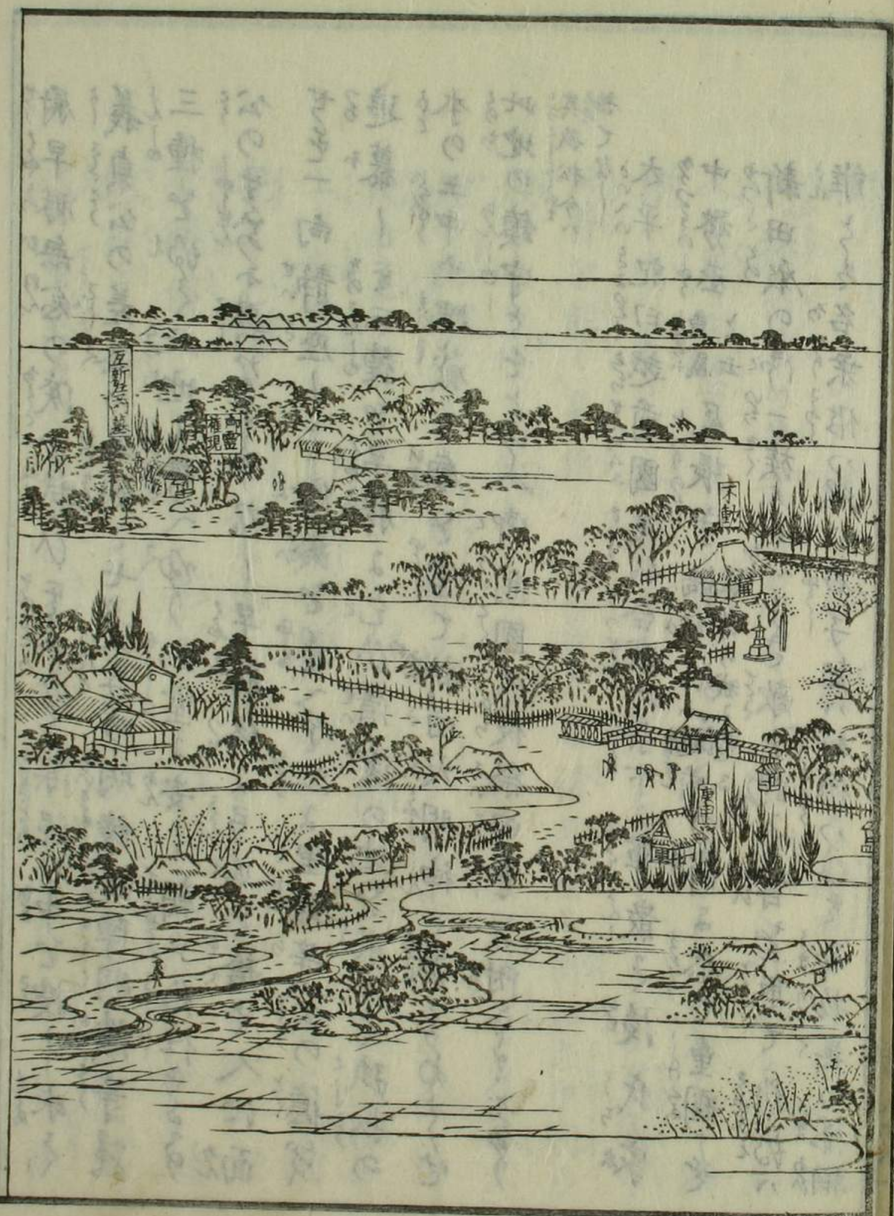


石観音堂



石観音堂　同所平間寺より七丁斗南よあり天台宗に
して慧日山明長寺と号ス本尊ハ石像の如意輪観音之
故ハ石観音の称あり　毎月十七日道俗通夜糸竜を霊亀石ハ門内左の
垣の傍よある所の石の手水鉢を以て　土人おもへらく此石ハ往一享保
不の霊石ゆゑ此地の漁人引揚なとせし時　十八年の秋海底より出ル
捧け揚く依る大悲の威神力なりと　二三の霊亀ゆゑ漁人と共に
損そさんと今ハ此石破れ　堂前よ居り同七月晦日竟よ
水をさし

新田大明神社　堀の内山王の社より耕田を隔て七丁斗南の方
渡田村の道より右ゆあり　渡田前ハ豆田ゆ作る　例祭ハ七月二日なり土俗
云毎年正月元日と七月二日の　暁ゆゑ必軍馬の駒く音
きるゆあるといふ　相伝河北矢口村ゆ鎮座まゆゑ廢子義興公の神
本社祭神　新田左中将源義貞朝臣の霊なり相伝義貞
霊此社よ来る
公延元二年丁丑閏七月二日越前國足羽の里ゆ戦ひ利
あらず竟よ主あき矢の尽ひ亡ひ骨鯁の臣亘新左衛門


左新左衛門墓
末動寺

河崎新田社
無動寺
亘新左衛門墓
無動寺
新田社

尉早勝無念の涙を拭ひ手不なる深泥の中を捜し求く
義貞公の差添の名剣と七ツ入子の明鏡及陣羽織等を
三種をゆく此地ゟ携へゆり幽室ゟ安し朝夕給仕するゟ
公の生ゟ異なるものなし早勝終ゟ弓馬を捨く人に面
せ毛一向静座しく餘齢を養へる然ゟ里民等公の徳を
追慕し毛三種を早勝ゟ乞ひ清潔の地を求めく孤松の
本の土中ゟ埋蔵し廟を営て新田大明神と崇まゐせ
此地の鎮守とせとゝゟ御開國の後祭田等を附らるとゝり
其孤松今ハ拔てなし
太平記曰越前國足羽合戦の条下ゟ軍散く後氏家
中務丞重國と云尾張守高任藤島の城ゟ越前の前ゟ参て重國に
新田殿の御一族と敵を討く首を取て作ゟハ
雖とも名乗作ゟ称ハ名字をハ知作ゟ馬物具の様相
順し兵ともの尸骸を見く腹をきり討死を仕作ゟ躰
何揉易常の葉武者あてをあ〳〵と覚く作是を其死
人の膚ゟ懸く作ゟる護ゟく作ゟく血をを未あ〳〵ハぬ
首ゟ土の著ゟる全瀾の守を副てそ出し〳〵ゟる尾張守
此首を能く見給ゟく作ゟる不思議や世ゟ新田左中将の
顔つゝゟ似ゟる所あるとや若それ〳〵ハ左の眉ゟ上に
矢の疵有へくく自鬢掃を抜く髪を掻あけ血を
洗き土をあ〳〵ひ落しく是を見給ゟ果し〳〵く左の眉の
上ゟ疵の跡あり是ゟ弥心付て帯ゟる二振の太刀をハ取
寄く見給ゟ金銀を延く作ゟ一振ゟ銀を以
金膝纏の上ゟ鬼切と云文字を沈ゟ一振ゟハ金を以
銀脛巾の上ゟ鬼丸と云文字を入らる是ハ共ゟ源氏重
代の重宝ゟく義貞の方ゟ伝ゟと聞ゟれハ未くの一族

共の帯へゝゝ太刀あを非をとゝゝゝゝ弥怪くれハ屬の守を
聞くゝゝ見給ふ吉野の帝北御宸筆ゆゝく朝敵征伐之
事叡慮所向偏在義貞武功選未求他可運早速之計
略者也と遊されゝゝ扨ハ義貞の首よ相違なるゝゝ
とく戸殿を輿よ乗せ時衆八人よ舁せく葬礼の為ゝ
往生院へ送ゝれ首をハ朱の唐櫃よ入氏家中務を副く
潛よ京都へ上せゝれゝり云云

新田山成就院聖無動寺と号ハ同所一丁斗南の方同ー
側よあゝ新田大明神の別當寺ゆゝく新義の真言宗
六郷の宝幢院よ属せり本尊不動明王ハ弘法大師の作
ゆゝく義貞公護持の霊像なりとゝゝ（今別堂を建て怒堂と号し安置の内）
左の方相伝義貞公入間川よ陣を布ゝゝ頃二童子の枕上ゝ
立ゝひ藩倉退治の心願あゝハ豆田の里よ安置しゝる所の

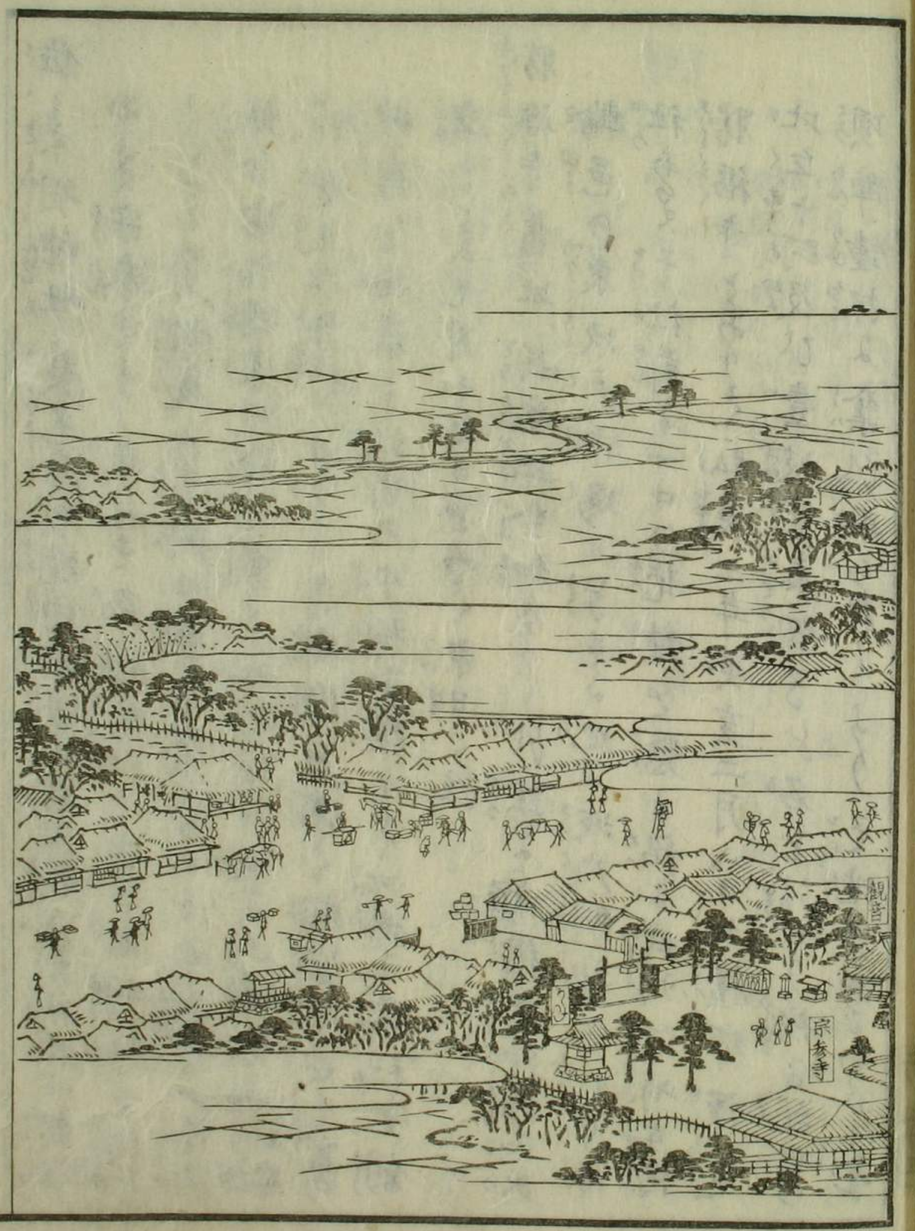
姥ヶ森
栗生左衛門塚

不動尊を崇信せよとなり依て義貞公此霊像を誓願を
こめて竟に高時を討亡しまゐらせ
亘新左衛門尉早勝居住旧址同所門前半町あまり西の方道
より左にあるを此地ハ元弘の頃亘新左衛門の采邑ゆゑ則此
地に住しうとのゐ早勝没するの後も里民其旧恩を忘れず
しゆゑ一祠を営建し早勝の霊を鎮め御霊権現と
崇敬せ傍に早勝の墳墓あり高さ三尺計礼石乃
層塔なり

姥ヶ森　成就院より七八町計南の方海濱にあり堀の内
山王の旅所より西の方へ續き馬場の形を存せ土人義貞寄附の
馬場なりと云ふ池ハ森の中に
有て絶えその形を存せるのみ
栗生左衛門尉忠良塚　同姥ヶ森より五丁計西の方海濱に
臨む方八間斗竹藪の中に有り五輪の石塔やゝ文字剥落せり相伝ふ

忠良卒せるの後早勝朋友の信をゆく其靈骨を此地より
埋蔵し塚を築こうとゝ
瑞龍山宗参寺　河崎驛砂子町の右側の向よあり洞家の禪
刹ゆく末吉の宝泉寺より属せかる釋迦如来ハ座像ゆて
一尺五寸計の唐佛なり　脇士ハ文殊普賢の木像にして
作者詳あらず　（当寺古ハ藥師の別当寺ゆく相伝ふ　当寺を養光寺の藥師此寺よありしと云）
佐々木四郎高綱の香花院ゆく頃ハ砂子一邑悉く当寺の
食地なりしとなる　開山ハ臨室玄統和尚と号昔ハ濟家の
禪林ゆく鎌倉の建長寺より属せしゆゑ遥の後天正より至る
小田原北条家の功臣間宮豊前守信盛とゝるハ（永禄二年小田原北条家ハ所領役帳より間宮豊前守武蔵久良岐郡杉田江戸川崎小机末吉東郡小雀入西郡冨屋三浦元文珠坊知行の地なる六百九十八貫百廿三文の地を領る）佐々木四郎高綱ゆ遠裔なりしゆハ寺境方八丁を寄
附し末吉邑宝泉寺四代の住持自山長老を請して当寺の中

興開山とし曹洞宗ゆ改む　信盛法名を瑞榮院殿雲谷
宗三大居士と号せ其石塔ハ当寺佛殿の後の方銀杏樹の
下に存ず　（元禄年間（慕下間宮家より宗参大居士供養の為其采邑川崎小田村ゆく寺領の地を寄附せしと）
（按ゆ当寺什物元禄四年辛未四月間宮家寺領寄附ゆ間宮豊前守信盛法名宗三とあり又当寺開基の墓碑ゆ雲谷宗参居士佐々木前豊前守入道浮康信と鐫ゆ信盛の法名を宗三ゆ作り康信の法名を宗参ゆ作る猶疑ふ然れとも寺号を宗参寺と称し又康信ハ当寺の開基とゆ時ゆ康信の法名ハ宗参なるゆ疑無きゆ）
高綱護持の本尊ハ如意輪観音の木佛ゆく座像一尺五寸
あるも作者詳ならず　別堂ゆ安しく本堂の左よあり
海采山養光寺　宗参寺より四丁斗先の方砂子町の道より左側ゆ
あり洞家の禪宗ゆく宗参寺より属せ指月和尚開創の寺院
ゆく本尊ハ藥師如来の座像二尺五寸計あり　延暦六年丁卯の
とし此地の海中より出現しゆとゝ　（土人伝云此本尊往古海中より出現の砂子を集めゆく其上より安置せしゆゑ砂子とゝる地名發るとゝ此靈像
濱の砂子を集めゆく其上より安置せしゆゑ砂子とゝる地名發るとゝ此靈像
昔ハ宗参寺の本尊なりしを後当寺より迁せとゝ）



河崎
宗三寺
養光寺
佐々木宮

佐々木明神社　養光寺の境内本堂の右に並へて此地の鎮守
なり宗参寺より奉祀せ祭神近江の佐々木明神に相同
しきといふ相殿に高綱の霊を崇むるとそお傳へ高綱
鎌倉右大将家の命を蒙て此河崎の地に山王宮（堀の内山王宮）を
建立の事ありしハ其縁を採て間宮信盛先霊の
神徳を追慕し江州の本祠を模し此地に當社を創
立せしと云九月十九日を以て祭日とす
勝福寺舊址　其廃跡今知れすしかれ南徳望陀郡奈良
輪邑の東坂戸市場と号する地に坂戸明神と称する
社あり其社前に一口の梵鐘を懸る銘に武州河崎庄内
勝福寺とありて弘長三年癸亥二月八日大檀那禅定
比丘十阿及ひ壹岐守泰綱名を注せり按に乱世の
頃陣鐘抔に奪ひ取られしより其地にあるべきを

按に東鑑に文應二年辛酉此年二月改元弘長と号す五月十三日甲戌今日書番の間廣御所に佐々木壹岐前司泰綱と渋谷太郎右衛門尉武重と口論に及ぶと云く然る時に鐘の銘に泰綱とあり東鑑に記せるの壹岐前司の子なるべし此泰綱ハ四郎高綱の甥なり信綱ハ二男なり

観音堂　市場村街道より左の方一心山専念寺といふる浄
刹に安置せり本尊千手大悲の像も寛朝の作御丈四寸
ありて紫式部の念持佛なりと云傳へ兼應年間近江
國石山観音の辺に老嫗一人住り或時西國巡礼の僧
愚蔵坊照西といふ沙門此老嫗の宿せし夜老嫗の
病悩を救ふ事報とし此霊像を授く後故ありて當
寺に安置なしるといへ毎月十七日ゆゑ系指の人多し
本堂に掲る額に一心山と書せし縁山前大僧正
雲外の筆なり

鶴見川　海道に架せる所の橋の号も又鶴見橋と唱へ

長二十七間水源ハ多磨郡小野路都筑郡長津田及ひ橘樹郡馬絹の辺より發して恩田川早瀬川矢上川鳥山川佐江戸川等の川々落合ひ鶴見村ヨ至る故ヨ鶴見川の号あり梅松論ホ元弘三年五月十四日鎌倉方討ふとしく武蔵守貞将大将あて向ふ下総より八千葉介貞胤義貞と同心の義有く攻上る間武蔵の鶴見の辺ヨ於て戦ひ打負て引退くとあり

末吉不動堂　末吉村ヨあり鶴見邑海道より北七町斗西ヨあり明王山不動院真福寺と号ひ天台宗ホして品川常行寺ヨ屬を本尊不動明王を安置をその像を坐像ホ〻く六尺餘あり慈覚大師の作といふ本堂ホハ十一面観音を安ひ坐像二尺斗り行基菩薩の作あり仁王門の額真福寺と書せ〻ハ増上寺大僧正智堂和尚の書あり

秋田城介義景旧舘地　其地今ところ〻〻東鑑ニ仁治二年十一月四日　将軍家武蔵野開發の事方違とて義景ハ武蔵國の鶴見の別荘ニ渡御頗ル壮觀ありとあり

醫王山成願寺　鶴見村の内ニて街道より山手へ入ること三丁斗ニ曹洞の禪刹ニして寺尾天光寺ニ属ス本尊釋迦如来ハ作者詳ならず開山ハ聲菴聞大和尚ニ号ス薬師堂ハ安置する所の薬師座像ハ〻〻七尺斗り古佛ニ

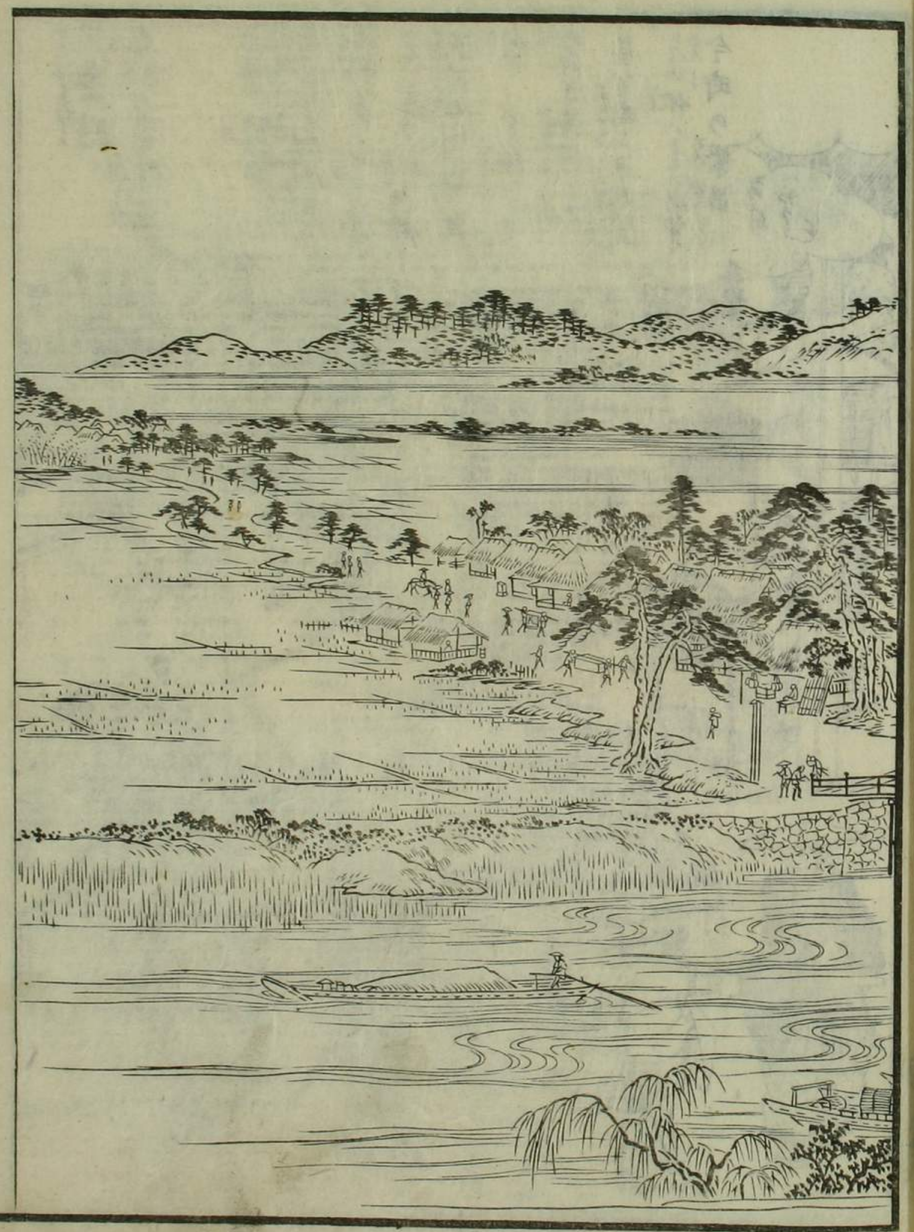
ハ作者知ラズ

白籏八幡宮　白籏村ハ義經の靈を鎮る所と云傳ふ別當

ハ神奈川能満院兼帯ス来由ハ拾遺江戸名所圖會ハ詳ス

子安観世音　子安村海道より右の方北岳ニあり子生山

東福寺と号ス新義の真言宗ハ神奈川の金蔵

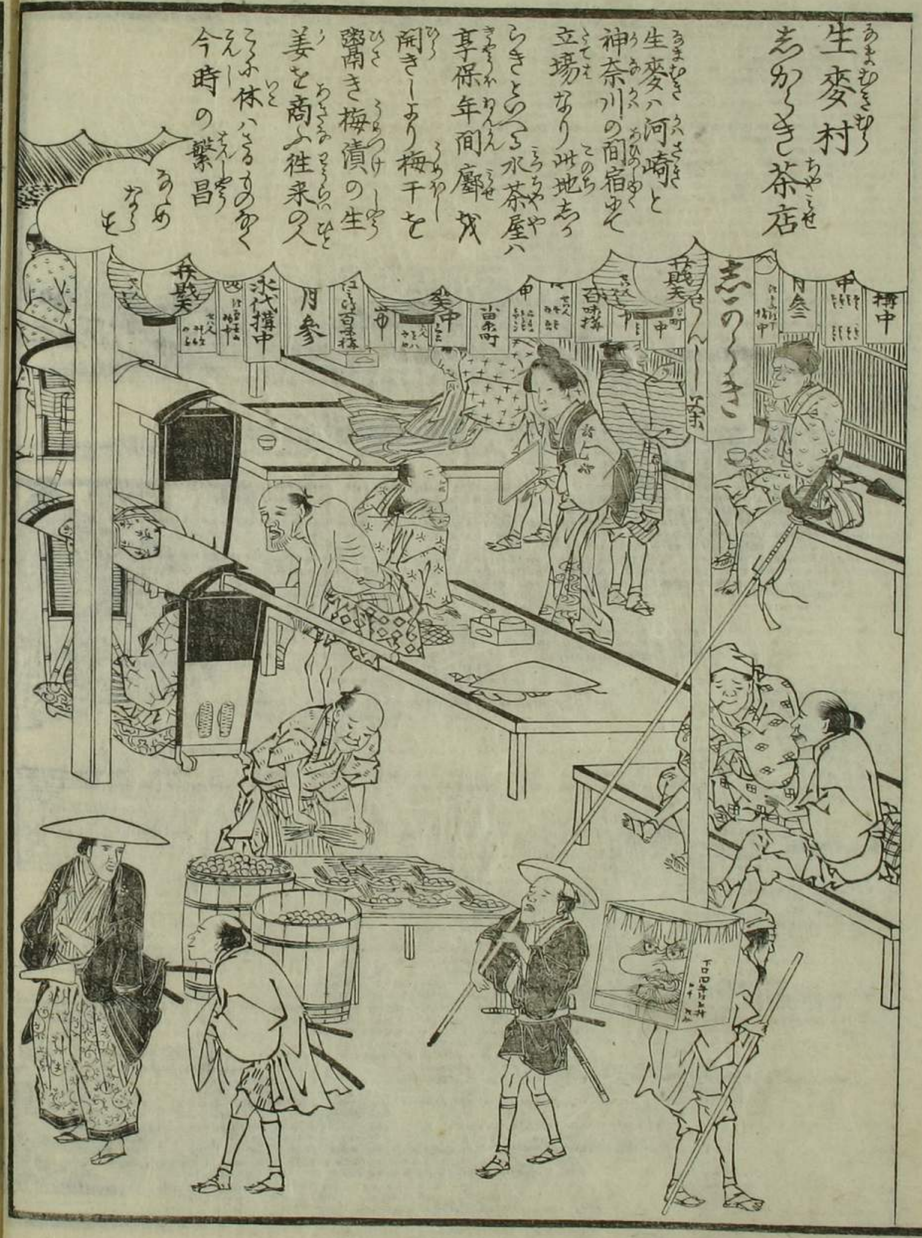


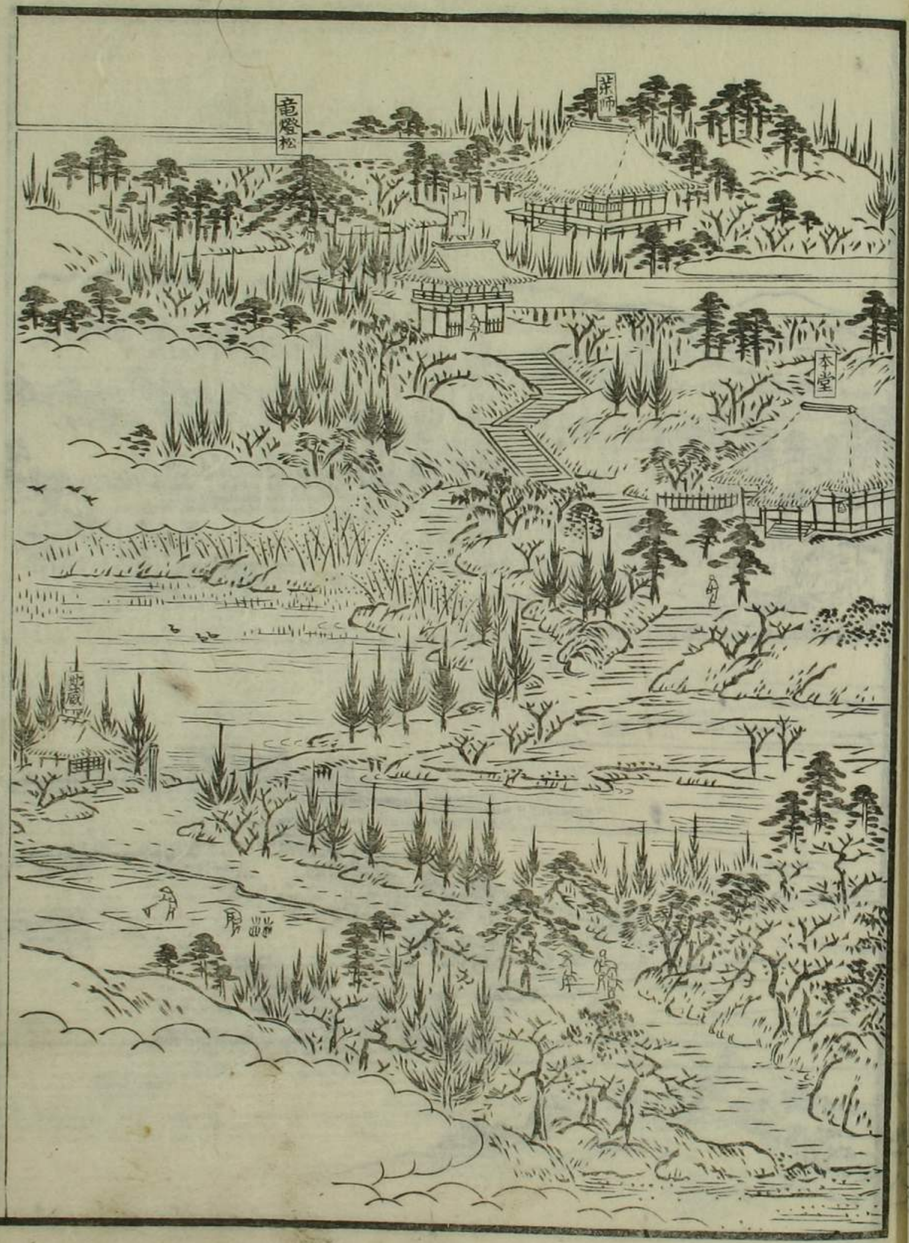
鶴見橋

橋より此方は米饅頭を賣家多く此地の名産とす鶴屋ゆとつくるもの也旧く慶長の頃より相續せるとぞ

生麦村
志ろ〳〵き茶店

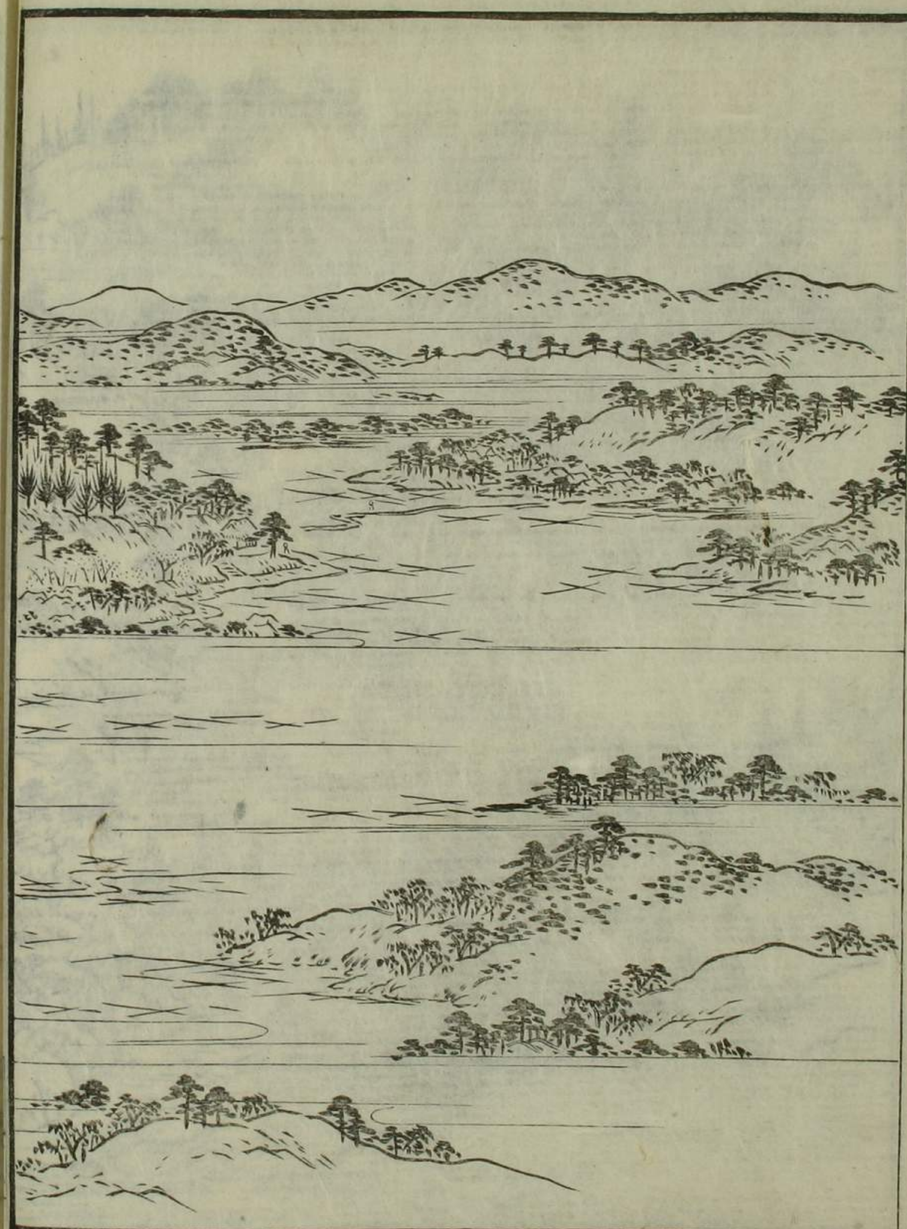
生麦ハ河崎と
神奈川の間宿にて
立場なり此地志
らきとの〳〵水茶屋ハ
享保年間廓戎
開きしより梅干を
鹽ぬき梅漬の生
姜を商ふ往来の人
こゝふ休ハるものゝ
今時の繁昌


志ろ〳〵き
茶
月参
樽中
中
月参
樽中
中
中


竜燈松
拝所
本堂
庫裏

わさえん
成願寺
庫裏
白山社

白旗八幡宮

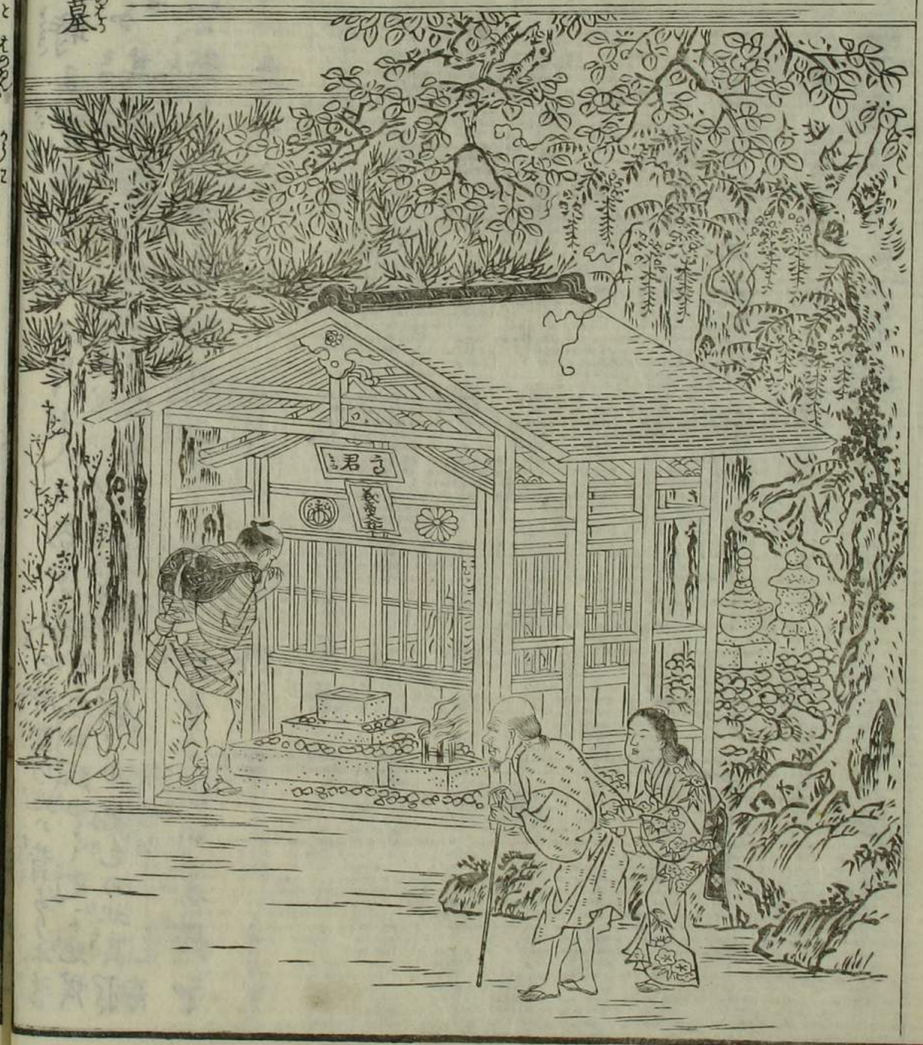


子生山
観音堂

院ハ屬を開基の大祖ハ勝覚僧正（理源大師の法孫）本尊ハ如意輪
観音ゆゑ佛工春日の作一寸八分の座像なり
縁起曰往古勝覚僧正一夜異僧を夢るゝあり然に
件の異僧告て曰く我ハ如意輪観音なり昔佛工春日
和州泊瀬の観音を彫刻せし序我形像をも刻し未
世の衆生を利益せよとなり然る我海中にあるゝ久し
今武州鶴見川の末生麥の浦ゆ漂泊を是我有縁の地
なり汝開東ゆ至を一宇を創立して安置せよと告ゆゑと
見て夢さめ僧正ハ奇異の思ひをなし直ゆ旅装して
此生麥の浦ゆ至られしに光明赫爍として不可思議の海中ゆ
浪ゆ隨つて勝覚僧正の掌上ゆ出現しゆゑ時ゆ又薩埵告
て曰く此地乾隅の山ゆ安置へしと即勝覚僧正當山ゆ登を
佛意ゆ任せ地を卜して草舍を経営し今の本堂を安置

せり時ゆ寛治元年三月十八日なり（今の本堂の地ハ昔ゆ安置の日改まりしと云）其後稲毛の領主稲毛三郎平重成（左衛門平重安題中稲毛の地其嗣所領なり）
なりを愁とし堂宇を修営し諸人供する所の米銭を
乞て一年の俸ゆ比し晨昏大士へ礼拝し事まりることを
恰も君ゆ給仕するゝ三年の後其妻懐妊し明年十一月
一男子を生せり重成歓喜ゆ堪へ美田三千畝
山林方一里有半の地を寄附し山を子安と号し院宇を
植本と称を尓来薩埵の威力益新ゆして禱賽する者
絡繹として絶を又堀川帝皇子まゝゆを愁へ
ゆゑハ勝覚僧正（法嗣）此本尊の威霊を奏聞に
依て前大納言藤原道房卿をして其御祈願のるに
當山ゆ詣てむ三年の後皇妃正ゆ妊娠しゆゑ明年五月
太子降誕なゝゆを則鳥羽院とゆまるハ此皇子なり

義高入道墓



按ふ鳥羽院ハ康和五年四月十六日ヨ降誕なり五月ハ誤あり

帝叡感斜なりしを勅して子生山東福寺の号を賜ふ遥の後文亀永正の間東國屢兵戦起て頂大ゑ衰廃せしうつも大悲閣のみも厳然たりしとあり

寺僧云今ヨ至て寄願ある者當寺ヨ祈願を定め本願ヨ給仕と称し絨信ヨ祈念し諸人供物の賽銭を乞年々求る所の諸願叶満あるをいふなりと

仙鶴山松隠寺　東寺尾村ふあり

享保の頃ハ松音寺と称ス

鎌倉建長寺雲外庵の佛壽禪師開創の古刹なり

禪師ハ建武二年二月十八日化寂とあり此地ハ雲外庵の采地なり

清家の禪林に三年二月十八日ヨ寂とあり

座像ゆ〻く二尺計あり

鎌倉志ゆゑ文和本る釋迦如来ハ

慈眼堂　松隠寺より渡し手ヶ門を出く小さ坂を

ゆ〻を廻りく二丁半計岡の上ヨあり十一面観音

佛工春日の作なり小机札所の一ゆ〻く松隠寺より

兼帯せり

義高入道墓　仁王門の傍古墳の前に石の地蔵を安せし小堂あり軒に
と称せ後里見と号小田原の合戦に討死せし人ありと云ふ未考此地の農家に
平田氏某あり其始祖ハ義高入道の家臣なりしとあり附て云松隠寺什
物の中に建武元年に記せし一圖あり人名を注せし中に地頭阿波國守護小笠原
内蔵人太郎入道といふ名あり云ふ阿波の國とあるを安房國の誤なるべし小笠原
内蔵人ハ先の義高入道の祖先なるべん或ハ又義高の名に附會しなる里見を混
交へしものか可考

護國山観福寿寺　東子安村新宿海道より右の方へ山脇ふ
あり世俗浦島寺と称せ昔ハ帰國山浦島院といひしる由
縁起に云へる當寺ハ淳和帝の勅願なりし檜尾僧都
開基なり
本堂　本尊聖観世音菩薩　立像なり御長一尺三寸あり世に浦島の
観世音とのみも称せり寺伝に云く當時
浦島子蓬壺の蘭墓にあそひ回里に走んと乗るの日神女一箇の玄亀と共に大悲の
尊像をあらはして曰く子今本土に帰去らんとせば渡海風波の難を凌き又長生
なるべしと乞ふ子ハ帰国を去るの後ハ海の國霞の浦に
霊像をうつし
浦島明神　社ハ乃ち浦島太郎の霊をまつる鶴山檜尾僧都より五世の後
堂に安置八千歳の御社と称する縁起に云く此
勝海上人の時に至て寛平七年七月七日霊告あり
あるとの事なり今丹後國竹野郡阿佐茂川の東
あり浅毛河明神と称せり又網野明神とも号す詞林采葉あり神社啓
蒙等の書に云へる和漢三才圖會に浦島子ハ根見命の後裔なりとあり可考
亀化大龍女　同本堂にあり浦島子海上に釣を垂くるとて渡海安穏守護の神なりしく船人多く是を崇敬せ
龍燈松　寺の後の方山の頂にあり伝へ此樹上今も時として龍燈の懸るあり
當寺の本尊ハ龍宮相義の霊像なり
目當燈篭　龍燈松の下にあり夜中入津の船の便とせり事保の頃
此地の農民松井某建立せしと云へり今に連綿
菩提樹　當寺山林に數株あり齋
浦島子龍の都より来れりと云へり
浦島太郎墓　堂前にあり島子自建置し　同足洗井　道の傍にあり
故に墓塚と云へり　今も里民の用水と
其旨跡今
井ともいへり又布袋丸の

日本紀雄略記曰　雄略天皇二十二年戊午秋七
月丹波國餘社郡管川人水江浦島子乗舟而釣
遂得大亀便化為女於是浦島子感以為婦相逐
入海到蓬萊山歴覩仙衆語在別巻
日本後紀淳和天皇天長二年帰郷至
今三百四十七年也　浦島子到蓬萊居之三年春
日初暖群鳥和鳴煙霞濃霭花樹競開問帰數之
日計婦曰列仙之所一去難再來縱帰故郷定非住
浦島子為訪親舊強催帰駕婦與一筥曰慎莫

竜燈松
観音堂
観音堂
浦島墓
観福寺

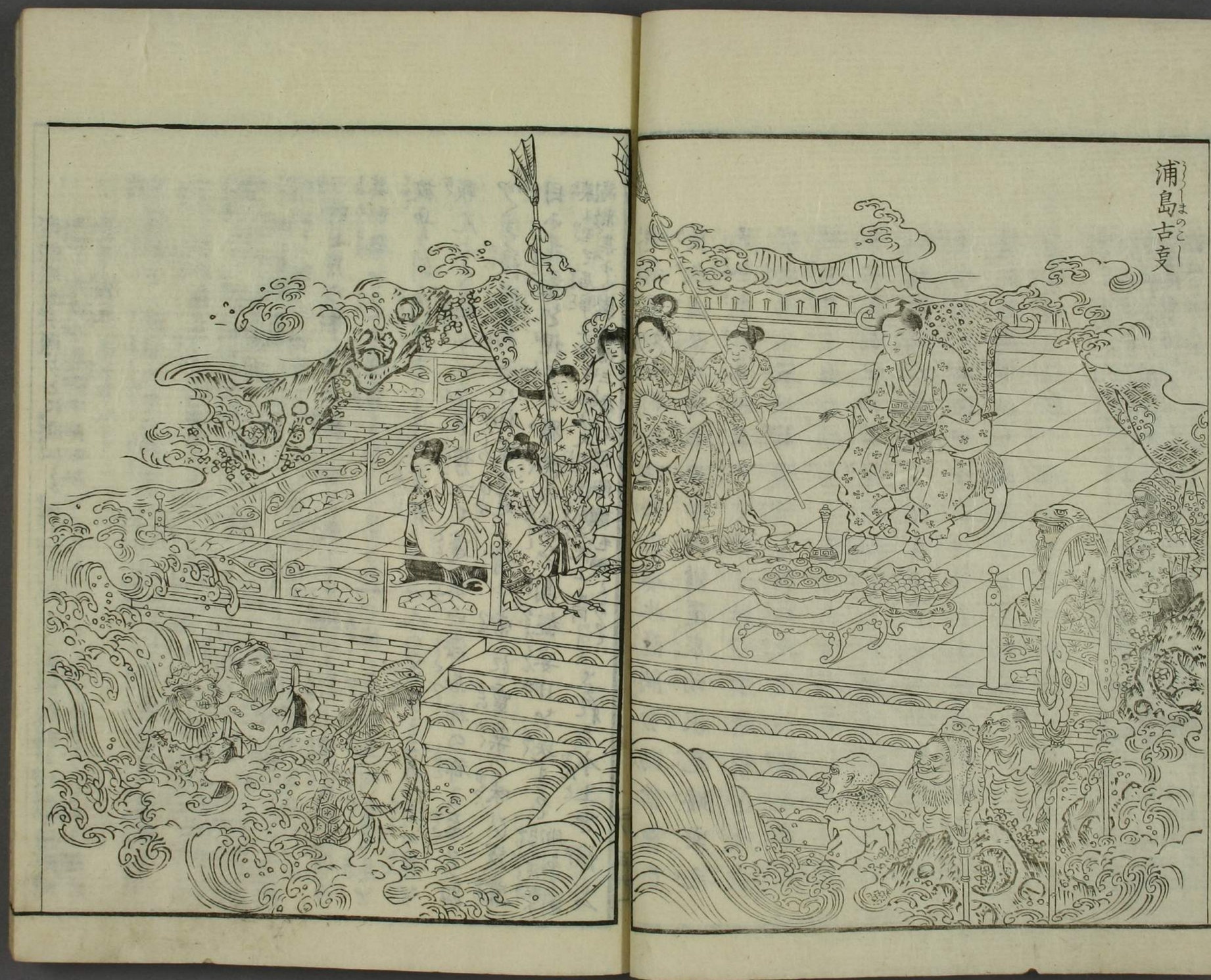
観福寿寺
浦島寺とも

開此筥若不開者自再相逢浦島子到本郷林園零落親舊悉亡逢人問之曰昔聞浦島子仙化而去漸過百年爰悵然如失歩於耶鄕心中大悵開匣見之於是浦島子忽變衰老皓白之人不去而死

万葉集

春日之霞時爾墨吉之岸爾出居而釣船之得乎良布見者古之事曽所念水江之浦島兒之堅魚乎釣鯛釣矜及七日家爾毛不来而海界乎過而擕行爾海若神之女爾邂爾伊許藝越相詐良比言成之賀婆加吉結常代爾至海若神之宮乃内隅之細有殿爾携二人入居而老目不爲死不爲而永世爾有家留物乎世間之愚人之吾妹兒爾告而語久須臾者家歸而父母爾事毛告良比如明日吾者來南登言家禮婆妹之答久常世邊爾復變來而如今將相跡奈良婆此匿開勿勤常曽巳良久爾堅目師事乎墨吉爾還來而家見跡家毛見金手里見跡里毛見金手帖常所許爾念久從家出而三歳之間爾墻毛無家滅目八跡此莒乎開而見手齒如來本家者將有登玉篋小披爾白雲之白箱出而常世邊棚引去者立走叫袖振反側足受利四管頓情潰失奴若有之皮毛皺奴黑有之髪毛白班奴由奈由奈波氣左倍絶而後遂寿死祁流水江之浦島子之家地見常世邊可住物乎劔刀已之心柄於曽也是君

按ずるに日本紀丹波國とそれさる前ある れはあり 續日本紀に元明天皇の和銅六年夏四月乙未ょ丹波國五郡を割くそもしめて丹後國を置とあり 夫より後与社郡ハ丹後ょ屬せしるそ 其地の書皆ことくく丹後國や丹後風土記和名抄扶桑畧記の類ひ與謝ょ作る又管川ハ丹後風土記ホ筒川ょ作る水江ハ日本紀ょ水江とも萬葉集ゆゑ或ハ墨吉とも書り浦島子


浦島古戈

傳 瀆浦島子傳 ともに澄江とも 按ふ仙覓律師の萬葉集抄より引所の丹後風土記より美頭乃脊能宇良志麻之古とありくもそふ水も澄江と義あり九通りして云へり

相傳往古　雄略天皇の御宇　日本紀雄略記二十二年戊午七月とあり　丹後國與謝郡管川の人ふ水江浦島子といふあり　寺記云相州三浦住人水江浦島太夫といふ大裡の役より付て丹波國餘佐郡管川と云ふ古書浦島子より作る寺記ふ太夫蓋上古の俗人云所より伝也其子ふ浦島太郎と云ふ或ハ太郎ともせり　瀆浦島子傳ふ浦島子何もの人なるを知らず　盖上古の俗人なり　齢三百歳を過ぐ　形容童子の如し人と為り仙を好み秘術を学ぶとあり又丹後風土記ふハ日下部百等ら祖ふ云云　簡川の島子と云是乃水江浦島子ミ云云

一時七月の事なるふ獨小舟ふ乗りて海上ふ釣し靈亀を得たり其形勢を見ふ尋常ふあらざるれハ怪みとひ且何奮て是を放ちゆ川狹辰あり彼亀化して一人の美女となり前の恩を報んとて島子らを携へて蓬莱山若神の都ふ至るぬかくて後浦島子ハ仙室の蓬ふ侍し常に靈藥の味ひ戎嘗目ふ花麗を視耳ふ雅樂の樂を聞観宴日を送りて　日本後記ふ浦島子蓬莱ふ至て居事三年とあり又丹後風土記上ふ同しく萬葉集ふも家ふ帰而三歳の之間爾櫓も艪も無しとあり　されと本土を懐ふ心起て獨二親を恋ふ神女ふ此るを告られハ神女ハ島子ら別を恋慕ふとゝも竟ふ止るき色も見えずハかひなく一箇の玉匣を與へて云く子遂ふ戒妄を遺れもしく再ひ此神仙境へ来らんとあらハ必此匣の裏を開きえるなかれと島子ら事を約しをり事外喜ひ彼匣を受伝へて分ち辞し去る頓蓬嶺の仙都を出るとゝへハいつしか與謝の舊里ふ皈て着ぬ　日本後記云浦島子天長二年郷ふ帰る今ふ至て三百四十七年ふ成る　水鏡ふ雄略天皇廿三年と云　詞林采葉抄云島子蓬莱ふ入の後帝王三十二代を送るとあり　同書　淳和天皇天長二年ことし浦島子ハ蓬莱へ中略　雄略天皇の御世ふ云く　乙巳ふあたりて又雄略天皇廿三年己未ふあたりて三百四十八年なり　日本紀二十二年とし戊午とも然るとあり　されと物換て星移て家園ハ変して河濵とあり山岳ハ改て江海となる荒蕪の閭邑煙て絶え舊塘寂寞として道路跡ふ迷しふくあらてふ知人さくなくてされハかゝ怪しみかつ驚き郷人ふ旧俗の行方を問ふ一人の翁答へて云く昔聞

水江の浦島子といふるもの釣を好み舟に乗しく海に遊ひ永く家に帰らすして幾數百歳を経るを恠しみ

續浦島子傳に曰ふ衣を洗ふの老嫗に問ふ旧里の古人を問嫗答へて曰く我年百有七歳にして唯我祖父の世古老口伝して数百歳を経るのみ傳来語に云く昔水江浦島子と云者あり釣を好舟に乗し久江浦に遊ひ遂に蓋海中に入る幾数百歳を経るを忘れ後記云むかし郎浦島子仙化して去り漸く百年を経ると云く

遥に隔つる舊里の遷変せしを悲歎し又仙遊の未央を想像く悲憶に堪へ前の誓ひを忘れく忽に玉匣を開きて裡より紫雲出く蓬城をさしく翹望としく去るの時に其形容忽然として衰老皓白の人と変ると云云

祈流水江之浦島子家地見云云丹後風土記に曰ふ島子俄に老翁となり遂に死を待よ天長二年丹後記上に同し續浦島子傳に曰ふ島子神女一諾の約を違へ仙遊再會の期を失ひ紅涙千行白鬢を掘し丹誠萬緒徘徊宮を乱其後金梁に鳴る玉液を飲紫霞を喰青衫を服頭鶴を延立く遠く仙洞の芳次を瞻る嚴河に遊しく海浦に隠淪ふ終を望く跡く遠く後代に仙と号く所謂浦島子傳古賢撰記せしものに曰ふ

万葉集氣佐倍絶而後遂壽死

法之とあり永仁二年甲午八月廿四日丹州箇川庄福田村宝蓮寺如法道場ゟ於く
芳命背き難きゟ依く筆跡を顧も痕籍ゟ紫毫を馳さぬと
寺記云後又八千歳の齢を持ち〳〵再ひ海神の都に入ゟ
いつゝ諸書の要ゟ抑當寺ハ淳和天皇の勅願ゆ〳〵凡九百七十有
餘年を歴る共古藍〳〵る同帝第四の妃ハ浦島子ゟ九世の
孫なり妃深く佛乗に帰しゆひ帝ゟ告まゝく空海阿闍
梨ゟ計る檜尾僧都實慧を〳〵く是を司ら免梵宇営構
あり〳〵く真言の密場となり〳〵ゟ

元亨釋書云如意法尼ハ丹後國余佐郡の人十歳ゆ〳〵王都ゟ入弘仁十三年帝靈夢を感しゆ〳〵の後花使を著人を裏を〳〵を世ゟ云天長元年天下意輪を敬重を〳〵く一匙を茶法雫を祈る空海妃の匙を捧く秘奥を修せ給ふ大野を守敏空海後先相競ひ法雫を祈る空海妃の匙を捧く秘奥を修せ給ふ雨澤天下ゟ給しゆ妃の同閨水江の浦島子と云ものあり妃ゟ先〳〵数百歳久しく仙郷ゟ棲む天長二年ゟゟ還る浦島子〳〵く妃の持ゟの匙を紫雲匙と云〳〵空海卽佛像を刻む時ゟ妃像を撞中ゟ〳〵むと云く同書の論ゟいく〳〵く妃の匙恐ら〳〵く神仙の器ゟあ〳〵しゆ共ハ是密乗の秘嚬なり其後星霜を経て宮殿風ゟ浦島子ハ是密乗の秘嚬なり何そ遂を〳〵んやとあり

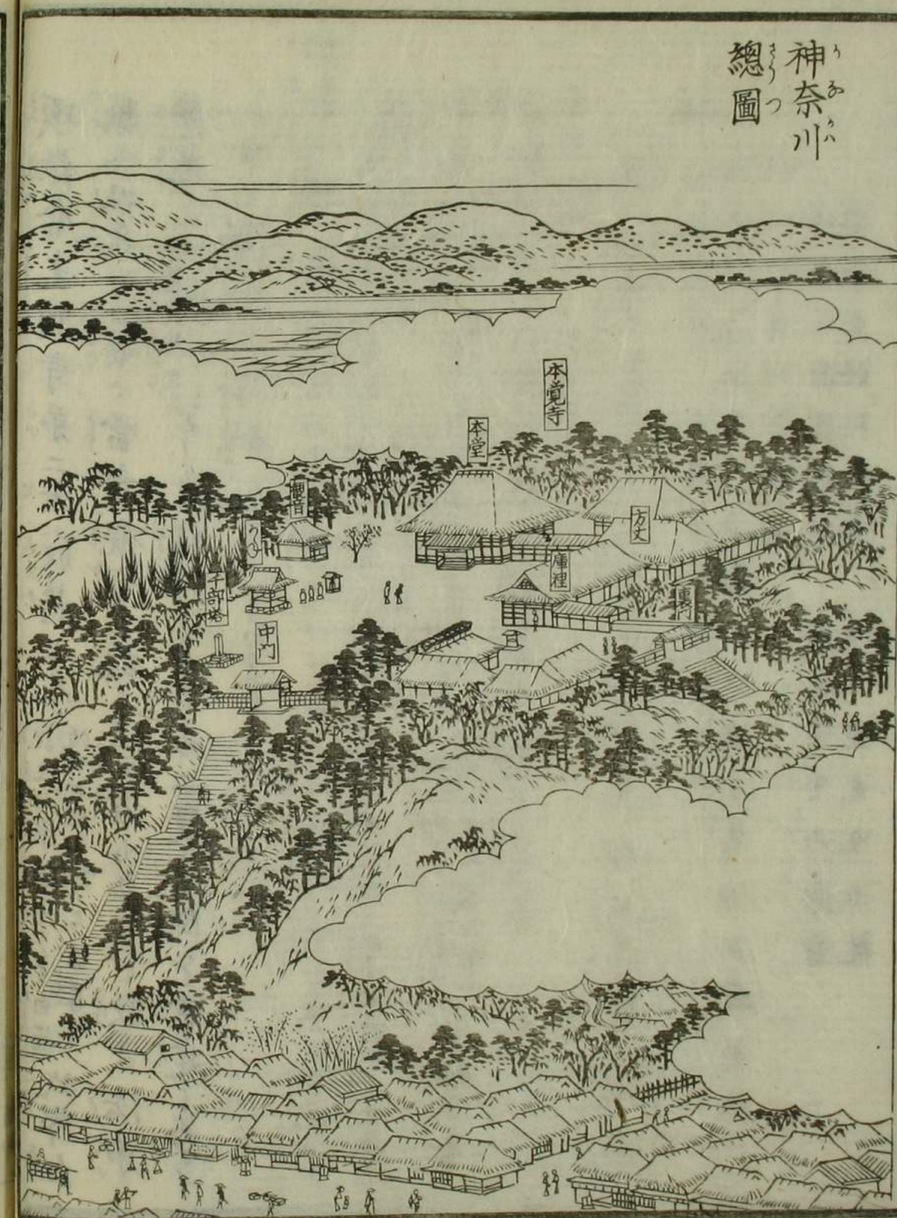
破ゆ〳〵く悲躰雨ゟそゝき朝の霧夕の月ハ香の煙を燈の光〳〵ま
かゝる仍く唯機縁感應の時を期ゆ〳〵然ゟ應長正和の

項鎌倉光明寺弟二世寂慧上人記主の家弟ゆ〳〵白旗流の大祖と伝ハ〳〵ゟ畧す故郷白
籟へ往来ゆ〳〵る毎ゟ當寺観音へ詣〳〵守者ゆ〳〵を歎き法弟
慧光上人姓大森氏相州人と〳〵て住持〳〵〳〵め二度寺院を営建〳〵あ
〳〵く浄業の精舎とせ〳〵ゆ〳〵

神奈川驛東海道五十三驛の一なり行程河崎より二里半ゆ
太平記梅花無尽蔵鎌倉大草紙等の書皆神奈川ゟ作る園大暦ゆも狩野川ゟ作る詳なり
此地の名義ゟ次の上無川の条下ゟ
本宿新町西の町迄四町の間の惣名青木町等の名あり滝の町下臺迄の間六町の惣名あり又臺より
向脛井澤と云地迄ゆ〳〵く神奈川驛と云へり
平安紀行　かの〳〵ゟ

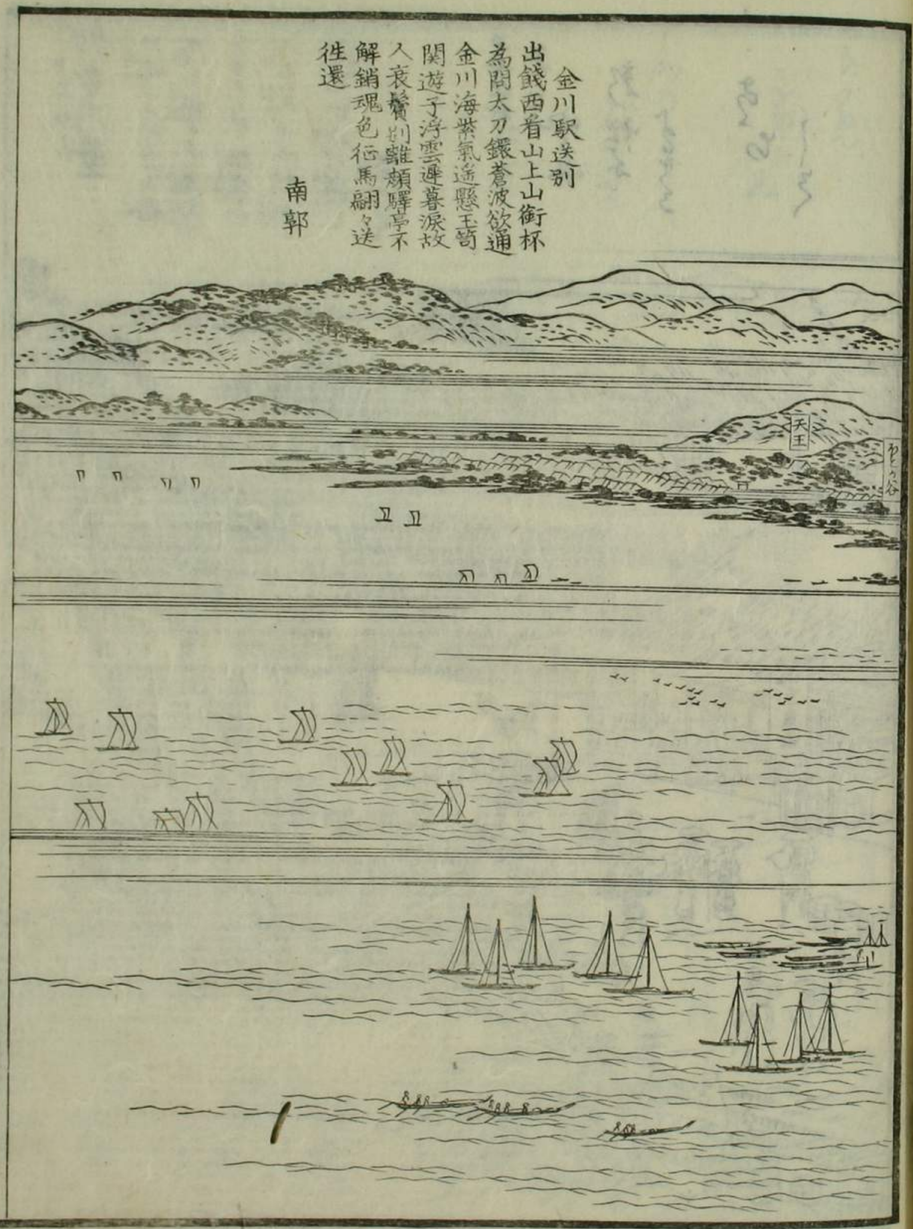
海人ゟ彩燭ゟ〳〵ゆ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ

神奈川總圖



其二

其三
人穴社
人穴


金川駅送別
出餞西看山上山銜杯
為問太刀鐵蒼波欲通
金川海紫氣遙懸玉筍
関遊子浮雲遲暮淚故
人衰鬢別離顔驛亭不
解銷魂色征馬翩々送
往還
南郭
天王

神奈川臺

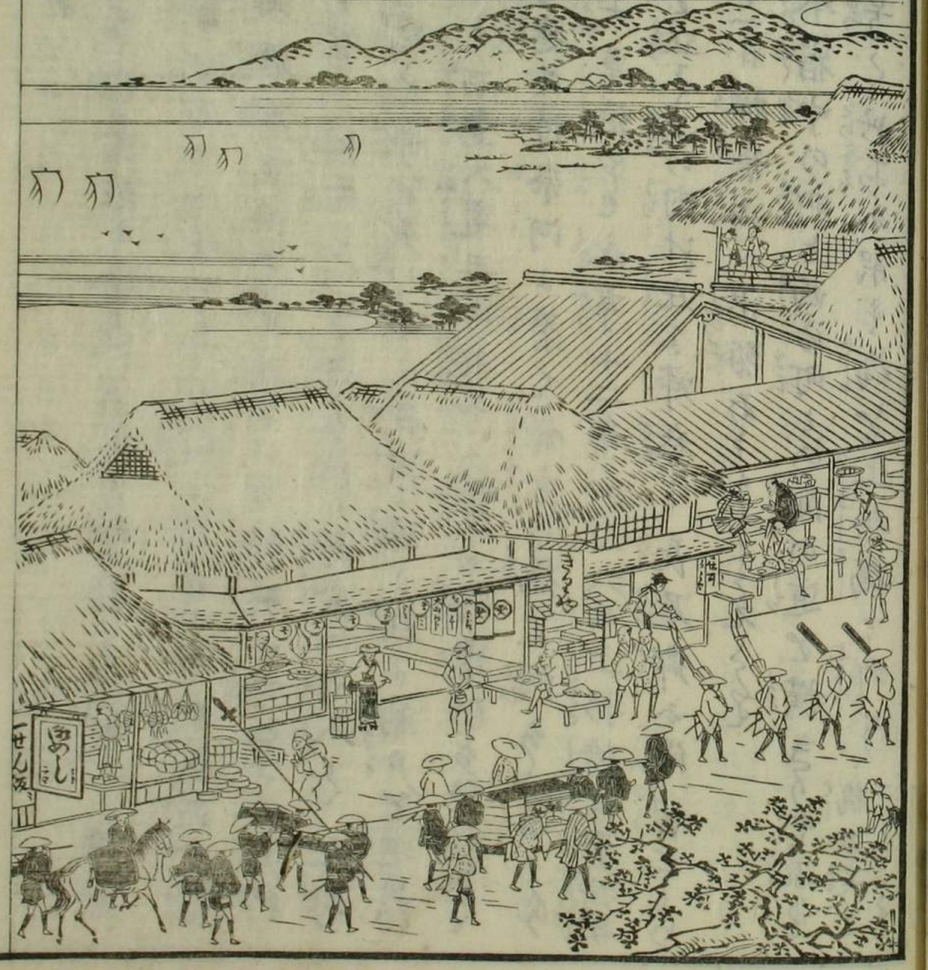
此地はいにしへ海岸に臨みて海亭をまうけ往来の人の足を止む此海辺を袖の浦と名つく

平安記行

あるはゆくゆく
新橋に
よるそる
さらに
しらく

ゆくゆく
ゆくゆく
かの
川の里

持資



浮世うかるる浮瀬をくゝのみかゆゝゆゝしの

此地ハ大平記ゆも正平七年の閏二月廿日の武蔵野合戦か新田義興服屋義治兄弟終ゝ二百餘騎ゝ打ゝかされ落行乃き方をなゝ討死せるき命ハ鎌倉へ打入るく足利左馬頭か逢く命を失ひゆと夜半過る程ゝ開戸を過ぬ途中ゆゝく石堂入道三浦助等の勢ゝ行逢ひゆひ駈くく此勢と打連て神奈河ゝ著て鎌倉の様を問ゆゝ由ゝゆ又鎌倉大草紙ゆゝと永亨十二年四月六日上杉修理亮持朝伊豆國を立く山の内社庄ゝ帰恭し長尾郷か滞留せしめ

同五月十一日神奈川へ出勢ありゝ

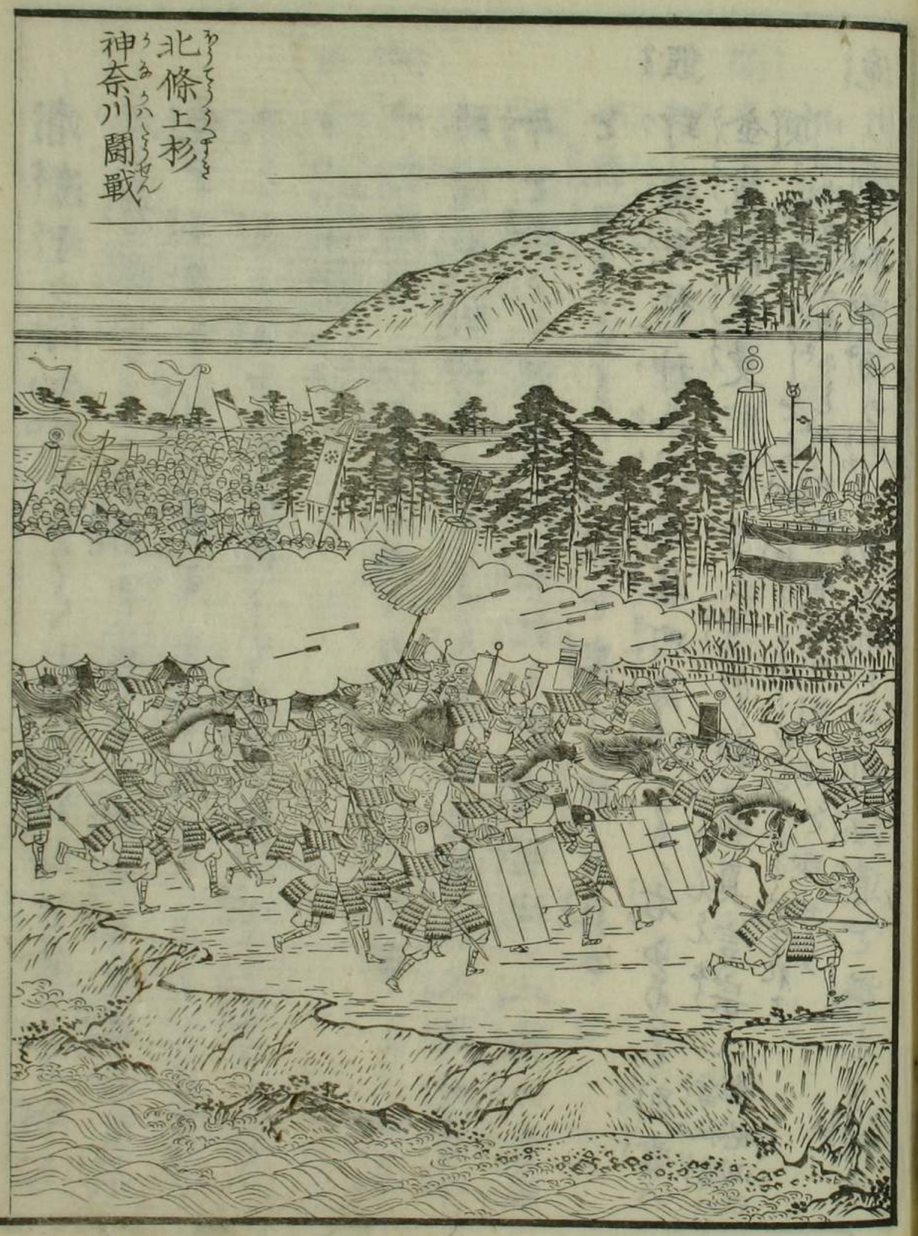
上無川　本宿中の町と西の町との間の道を横きりて流る小溝を号く此あか架も橋を上無橋と称す　橋の長さ二間か

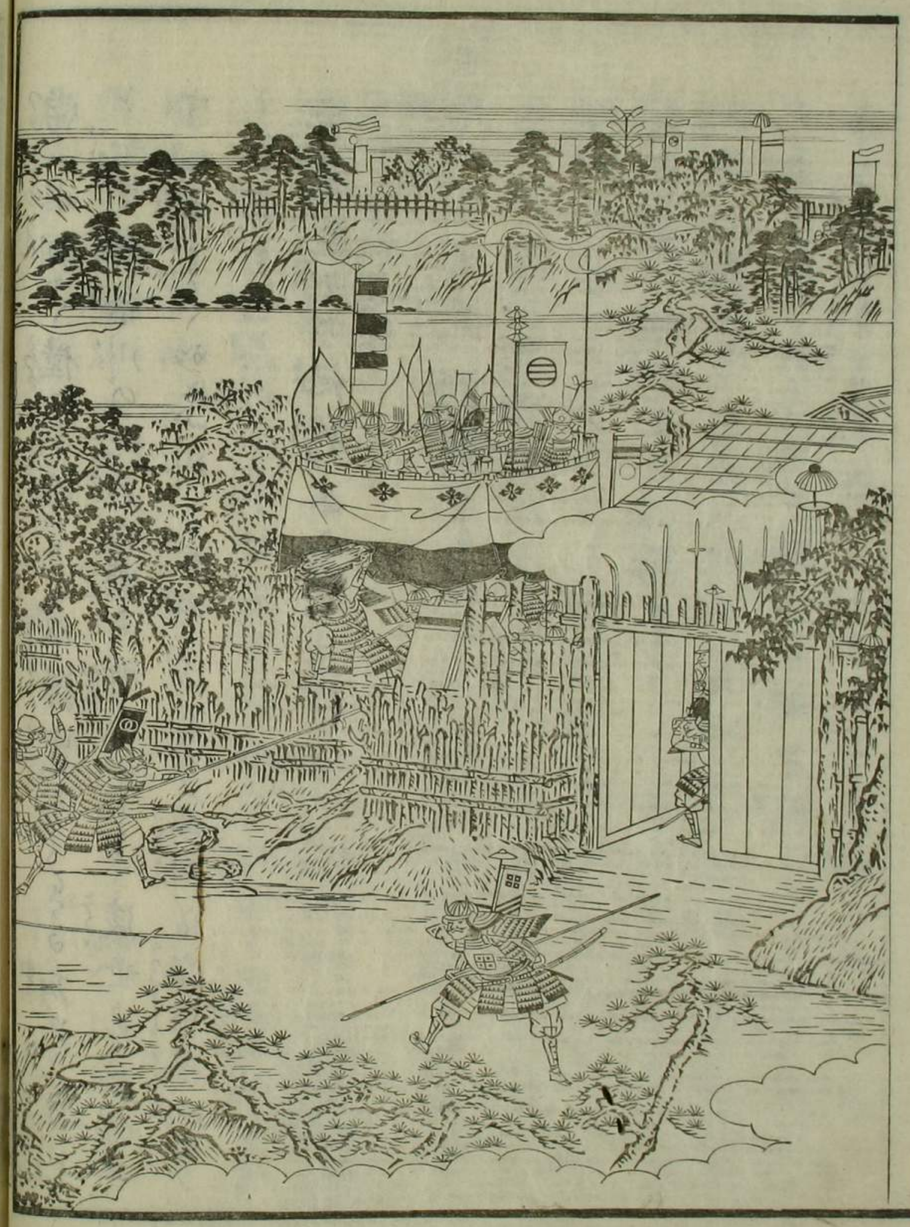
常ハ水涸く僅の小流なるも水源定なゝる故か上無川と云則神奈川の地名の興る所以ゆゝく後世英志の二字を略ゝかゝ奈川と云るなり品川も亦下無川なりゝを是も毛志の二字を省きかく呼る由寛永五年齊藤徳元の紀行ふゝえゝあり

（小田原北条家の分限帳矢野彦六といふ人武州神奈川南条高崎の地を領せとあり）

海運山能満院満願寺と号せ本宿荒井町道より右側ゝあり古義の真言宗ゆゝく鳥山三會寺ゝ属せり開基ハ内海光善といふる人なる開山ハ重運と号ひ本尊虚空蔵菩薩ハ海中より出現あるゝ三寸九分の霊像なり相傳正安元年己亥八月十三日此地の漁者ゝ内海新四郎光善といへるあり此日海中か網を沈ゝく此霊像を得あり然ゝかる光善の一女子ゝ託ゝて曰く我ハ是房州

北條上杉
神奈川闘戦





清澄寺の閼伽井あり〳〵七百有餘歳を歴〳〵今此
地の有縁あり〳〵彼所へ移し奉り汝堂宇を営むべし我
像を安置せよ必子孫を〳〵幸福あ〳〵しめんとなり
依て直に當寺を開創して此霊像を安し奉るといふ
光善の遠孫此地よりて今に連綿
洲崎明神祠　海道の右側にあり普門寺別當〳〵安房
國洲崎明神に同し〳〵房総志料に天比理乃咩
命を祭ると源平盛衰記に洲崎明神八幡大菩薩
を祝奉るとあるとハ両説を挙て疑を存せ
熊野権現社　神奈川本宿町海道より右にあり別當ハ
金蔵院東曼陀羅寺と号し新義真言宗と
頂に勧請あり〳〵そこの地へ移し
旧地権現山の頂に
当社清ハ熊野権現の草祠を再せり
滝の橋　本宿西の町と滝の町との間海道を横きり流る
川に架せり此橋下の流を滝の川と号く加ふるに水源を
七八町西の方堰村と云より発し和の流なり
橋本宗與寺　橋より向ふの川添ひ町なり西の方道より
左にあり曹洞の禅宗にて同所本覚寺に属せり
本尊釋迦牟尼ハ定朝の作にして一尺五寸の座像なり
此外なる古ハ山上観音堂五層の塔
大将軍家御上洛の時此地本宿に御旅館を儲させられ
一項御茶の水に掬せられしと云
観音山　山頂に観音堂あり故に山の号とせり宗與寺に
令せる所〳〵石磴聳立して寺に徳門の正中に對せ
本尊正観音の像ハ毘首羯摩天の作にして五寸九分
あり昔焼亡ありしその旧記を失ひぬ今其来由を考
へといふ

洲崎明神（すさきみょうじん）

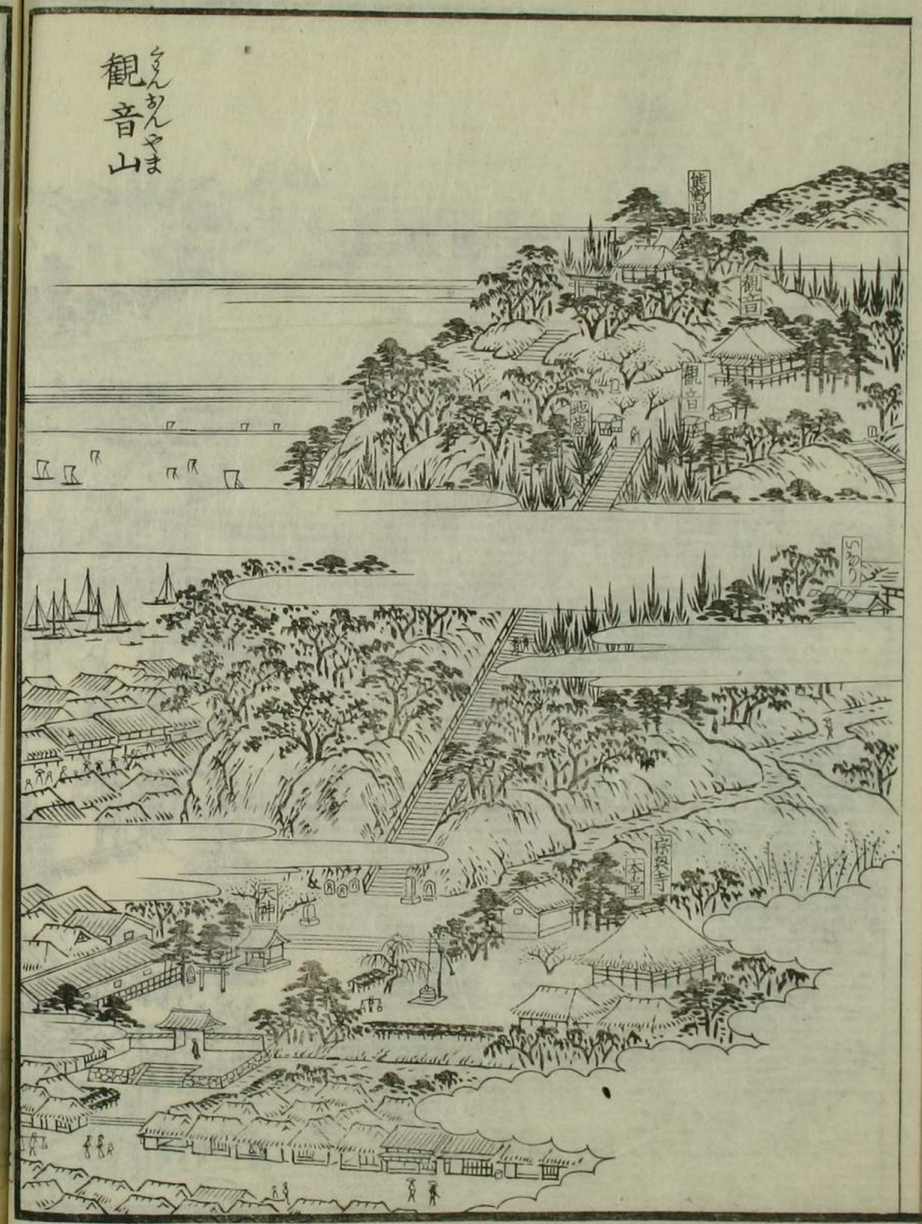
本社

神殿

神明

天神

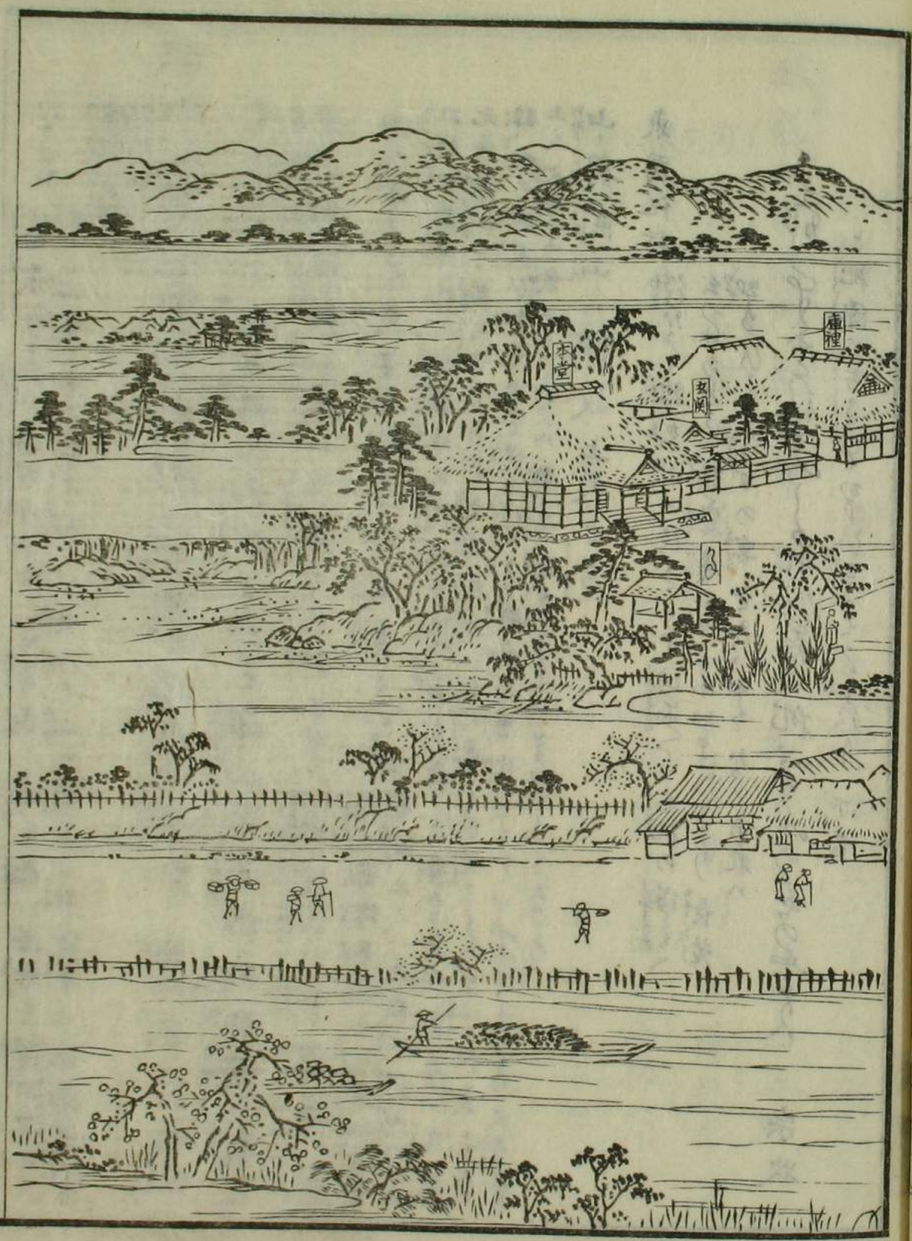
神木

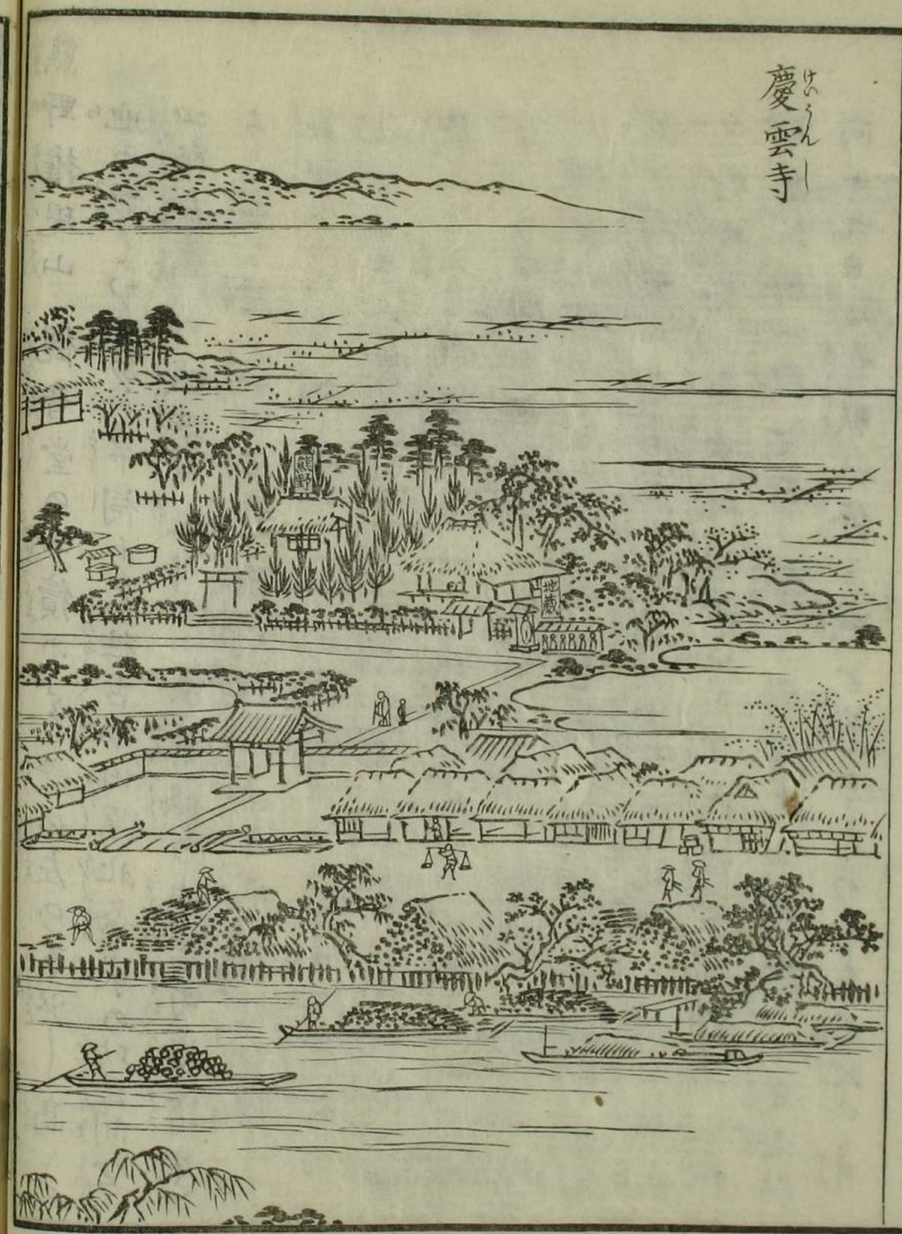


観音山

熊野権現山　観音堂の山續き堂の左の方少し高き地ゐ形さかりなる草祠あり往古小田原北条家の功臣間宮四郎左衛門の城塁の址なりと云前條の本宿町海道道より右ゑ付る和の熊野権現社とのゝ或ハ此社を移して其跡へこの草祠を置く旧地を存せるゆゑ小田原記ゑ

永正七年の秋七月上杉治部少輔入道建芳ゑ被官上田蔵人と云ゝ者謀叛を企く北條早雲ゑ一味し武州神奈川なる熊野権現山を城廓ゑ構へ楯籠る依く治部少輔自大將とゝく管領ゑ加勢成田下総守浜江孫次郎藤田虎壽丸大石源左衛門長尾孫太郎ゑ名代矢野安藝入道長尾但馬守ゑ名代成田中務丞ゑ外武蔵の南一揆をかり催し同月十一日権現山ゐ走向ひ同十九日迫責戦ひ終ゑ城を落ちとあるゝ此地の




慶雲寺

なり（小田原記ニ此山ハ四方嶮岨ニシテ岸高く峙チ南ハ海北ハ深田なり西ハ山續くなり）を堀切て山ヲ續くる平覚寺の地蔵堂を根城ヨリ取立と云

吉祥山慶運寺茅草院と号す　滝の橋の北詰より西の方へ一町半

ばかり入る　飯田道の右側にあり　浄土宗　花洛知恩院ニ属す

本尊阿弥陀如来ハ立像三尺計あり　作者不知　開山ハ音譽聖観

上人ゆゑ文安四年丁卯開基なり　浄土傳燈系図ニ定蓮社音譽聖観上人ハ氏族未詳　或ハ江州甲賀源氏と初橋場の法源寺第二世とあり　又當寺を開創あり　空徳元年　増上寺第三世とあり　文明年間一日火車を示現し空中に乗去り辞世の頌及ひ和哥あり　世ニ伝ふ観音の應化なりとのことなり　又音譽上人火車ニ乗りしハ新著聞集にあり

中與開山ハ願故上人と号す

東國紀行

彼ハ此宗牧の紀行ニ慶雲を作る後雲を運ニ改るなり　又宗牧乃

當寺ニ宿りしるしを天文十四年三月三日なり

臥龍山雲松院乾徳寺と号す　滝の橋際より一里十四五町西の

方小机村長津田街道の左側にあり　曹洞宗の禅林ゆゑ

遠州の石雲院ニ属せり　本尊虚空蔵菩薩ハ木佛にして

座像ハ寸計あり　當寺ハ小机の城代笠原越前守信為開創

の寺院ゆゑ　當寺霊牌ニ乾徳院殿雲松道慶庵主　明應四年乙卯六月八日と注ス

大和尚と号す　大永六年丙戌二月十五日化寂　開山ハ李雲永岳

月舟の弟子　總門の額臥龍山の三大字ハ僧

号ハ武勇技藝とともニ無双の達人ゆゑ　小田原ニ弘治三年丁巳七月二十六日　武州小机の城代笠原越前守小田原ニ逝去ス　法名雲昌慶公庵主と

氏康ニ忠功あり　其子ハ能登守なり　又同書ニ永禄十年　信玄小田原へ発向するとある条下に

雲松道慶　小机ハ長綱の代ニ笠原能登守在城せしとあるハ父子共ニ二代の間小机の城代なり

小机ハ長綱の代ニ笠原能登守在城せしとあるハ父子共ニ二代の間小机の城代なり

鐘　堂前左の方ニあり　銘ハ明応四年ハ弘治三年ニ先ル九六十三年　他日訂正きのこと

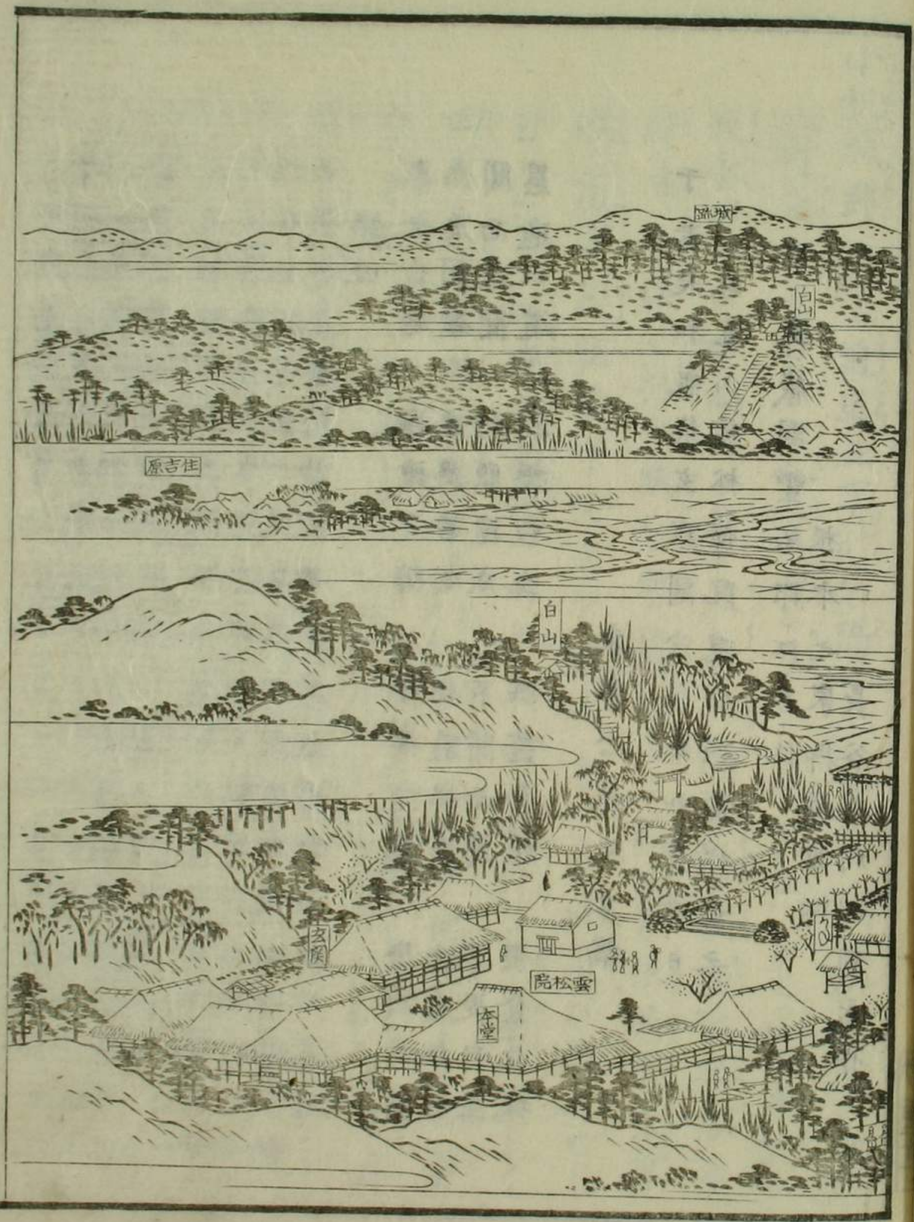
撰ス　其文左のごとし

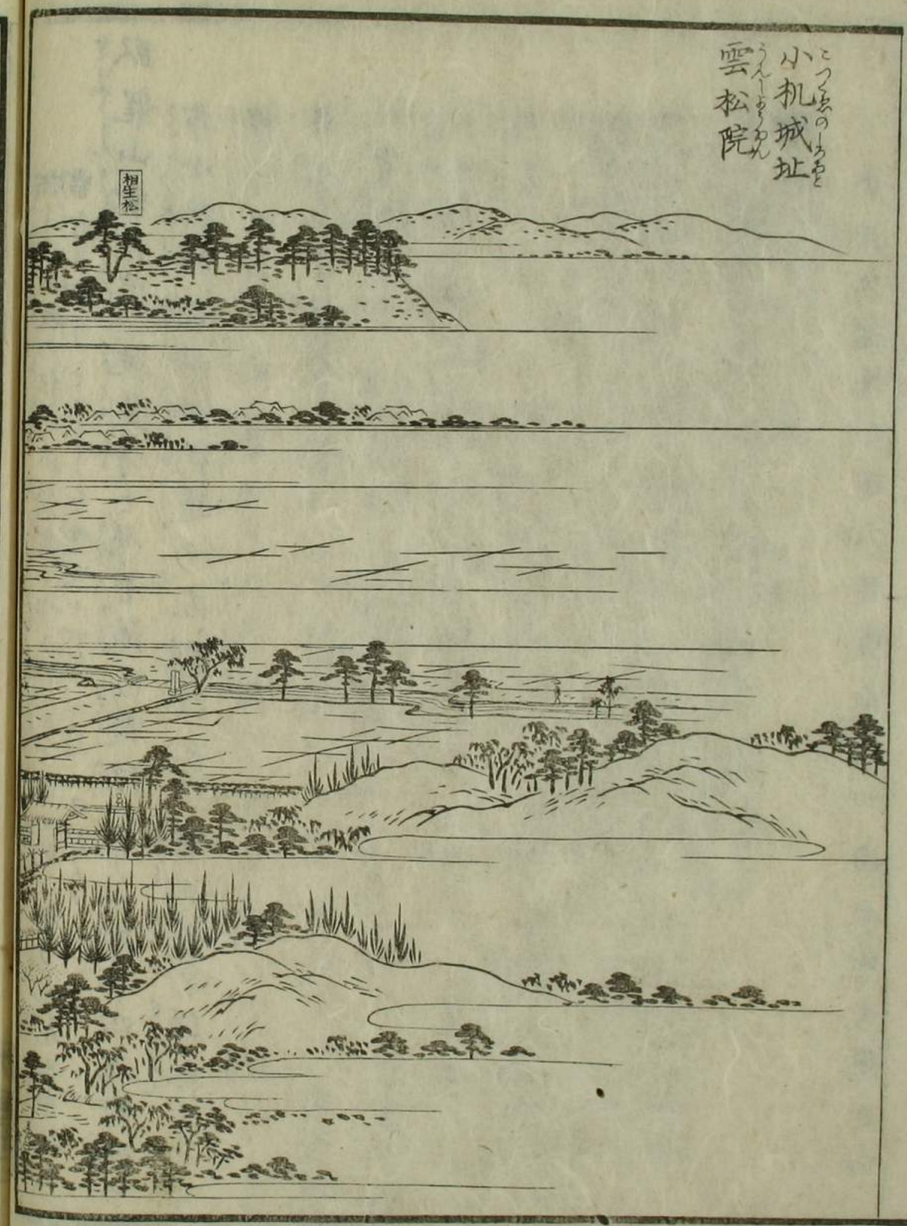
越前守没卒の年代ハ違禅師

夫法界聖凡三途六道皆由人一念之所成舉世而

なかるべしかこれもみしかれの為の机ぞかの為の宝なりハ

と机源の古事をひるるなり　下畧


城跡
白山社
住吉原
白山
雲松院
本堂


こつるのしろあと
小机城址
うんしようゐん
雲松院
相生松

言之則有陰陽晝夜之分在人而言之有迷語聖凡之別蓋以我佛垂慈齋六合無分天上人間惟以利生爲事然而種々隨機導利有情同圓覺性故又設鐘聲佛號技濟淪稱其功德曷勝言哉茲有

武州都築郡小机庄根古屋郷臥竜山雲松院住持別峰者曹洞之末孫大源汎下遠州高尾石雲院之門葉也於是歳壬戌暮春積衆緣開鑄銅斯鐘以就并新建立樓門而施鐘於其梁因質余銘而記之

銘曰

舉世皆暗　惟鐘是明　聲傳法界　響徹幽冥
幽處聞鐘　幽處皆明　明通幽處　幽處無形
聞而返聞　行願速成　不聞而聞　菩提自生
恩遍六道　利極四生　無盡含識　俱登化城

于時天和龍集玄戯閹茂李春如意珠日

臥竜山雲松禪院現住宗瓢代置之

東皐心越杜多稿

武蔵國豐島郡江戸住
根本之家御鑄物師
長谷川刑部國永作

小机城跡　同し通道五丁計を隔て道より右の方城坂と云を二町ゆ登くあるを土人ハ城山と号せり今官林とも小田原記ハ天永四年甲申正月十三日北条氏綱上杉朝興を攻落し歸陣の後小机の城を普請ありと記せるを依老臣笠原越前守同能登守父子を城代とし〻此所ハ居住せしむとなり封境今南北一町余東西四町計の小阜にして回るふ遑の形を存せるを高六七丈あり中心の平地纔に百歩なるもあり〻今畠とも古ハ橘樹郡都築郡ふるくハ武の属郷百八郷ありしなり又笠原家の臣沼上出羽とゝ云る人の子孫今此地に存せ其家に刀剣の類を収むると云

按に北条家分限帳に沼上とゝ云る人小机の某〻を云あり〻又同書に小笠原藤左衛門と云人小机ハ朔と領し笠原佐渡と云を左衛門佐知行の内小机細島其輪を領し笠原弥十郎と云人小机の内を領し笠原平左衛門と云人も小机の内を領し笠原平左衛門と云も越前守の氏族なりしあるべし

高田玄番助小机菅生の内を領し笠原平左衛門岡の地名を注しかへ〻し

白山權現　城山の東に山背にあるを古の鎮守なりしと云伝へ

松亀山泉谷寺　本覚院と号し城山より五六町を隔て長津田通道の左にあり大門三丁計り間左右に櫻の列樹あり

此地の小名を泉の谷と云ふ寺の号とせり　浄土宗にして花洛智恩院に属せり　本尊は一光三尊の阿弥陀如来本像にして二尺八寸計り

作者未考

当寺は鈴木但馬守と云る人の開創なり

岡山を名蓮社見誉大道善悦大和尚と号す　弘治元年八月二日化寂す下徳飯沼弘経寺の六世なり

中門の前に天正十八年小田原北条家より建る

天正十八年北制札あり

淡島明神社　相模街道大熊村より左へ十三四町入る　折本村にあり　神主雲路氏奉祀す

祭禮は二月三日　縁日は毎月三日十三日なり　祭神は少彦名命及び神功皇后二座なり　勧請の初は詳ならず と云

櫻樹　神前東の方にあり　昔土人此山に入櫻の花樹を薪にせんとして逆を伐る日を経て後山より出て此の花樹の傍に至りて

大なる蛇あり　其樹を惜む人皆辺に集まり樹を伐れば当社の神の愛樹なり　其根株を残し生ずる蘖の若木社の上にあり今其根株を分ち移して今神前の西に移し植る

淡島神祠之碑

寛保壬戌夏新本の邑長藤原英至と云る人邑民と共に謀り当社を新にせんとその頃此地は松下某公の采邑なり　英至此事を告ぐ某公も亦ハ英至退く文を麻布善福寺の了誉上人に請ひ書を鳥石山人に求む篆額は本多康桓竜の画は古山平國豊の筆なり

多目周防守宅地　青木町の中にあり　其地定かならず

小田原記信玄小田原を襲ふ条下に多目周防守その項

青木と云ふ居住せり

牧の城　上州の國峯岩倉岩落去の時討死せり

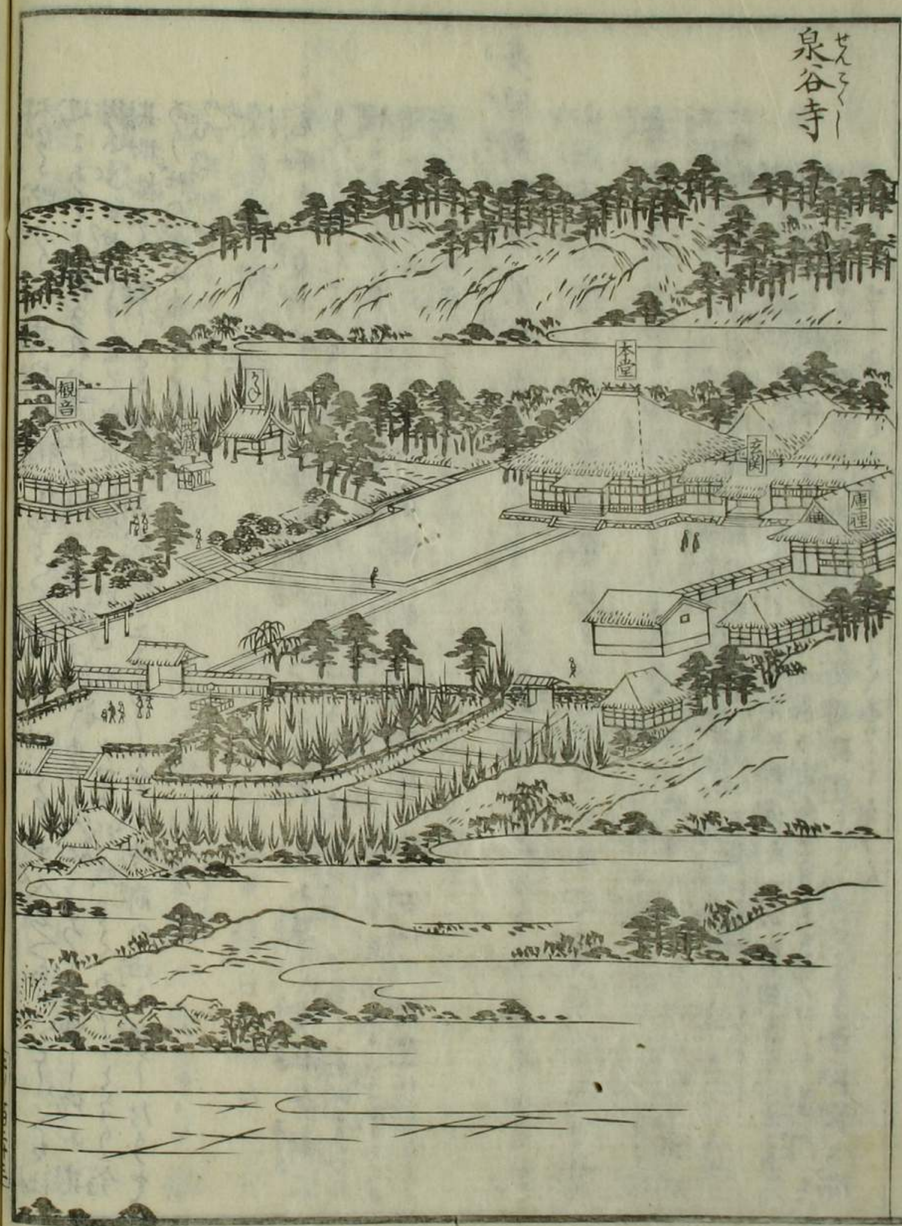
小田原城　北条家の不領従帳に多米新左衛門青木を領由云々

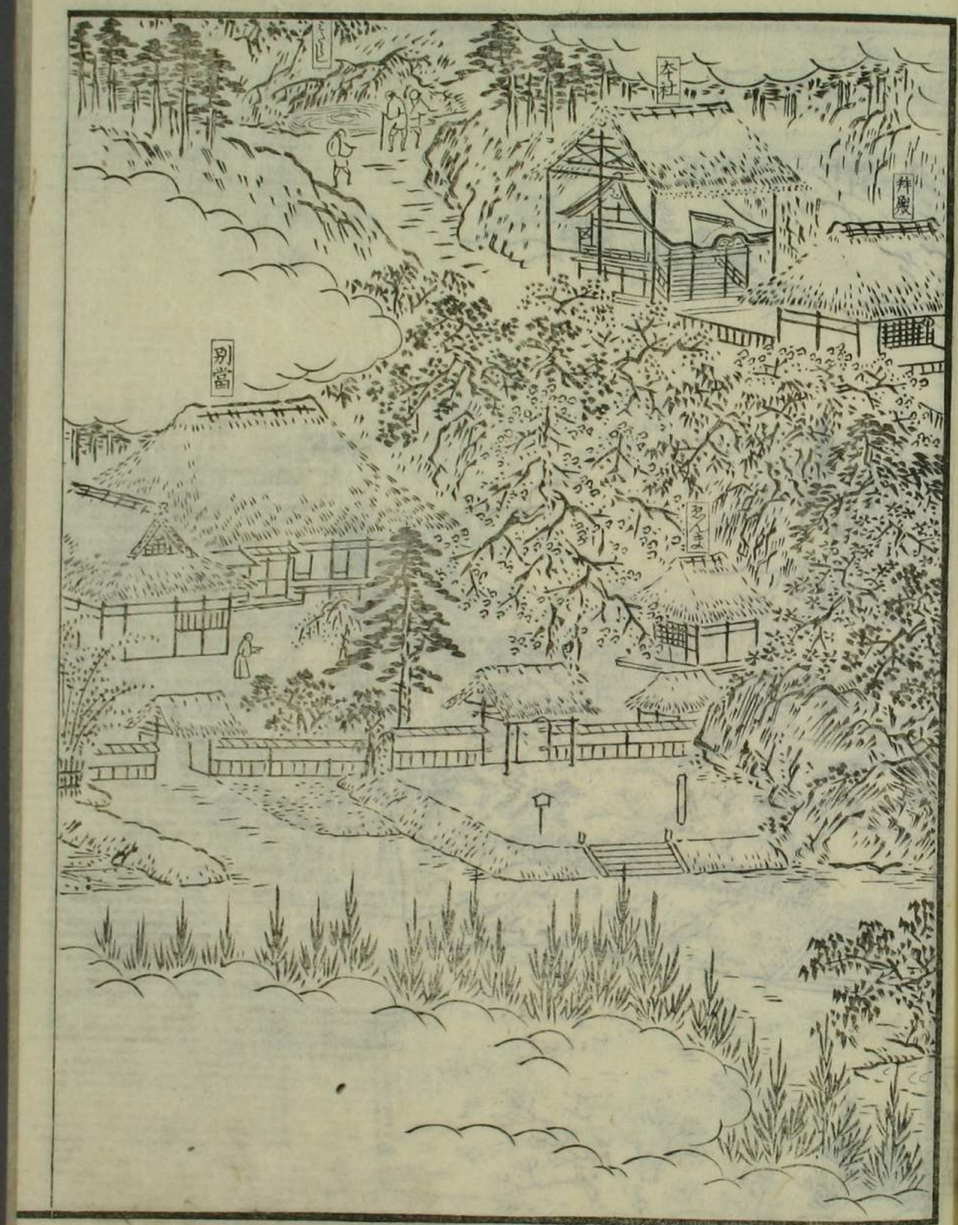
多目周防守　吉良左兵衛佐義門の家臣なりと云

北条家の不領従帳に多目周防守と考へ

北条氏康の妹聟なり　義門を後周防守と云　小田原より吉良家へ附人なりしせしなり　吉良家に属しなり

住吉原


せんこくじ
泉谷寺
大堂
観音
唐堂


本社
拝殿
別當

師岡
熊野権現宮
山王
地蔵
弁天

本社

折本村
淡島明神社

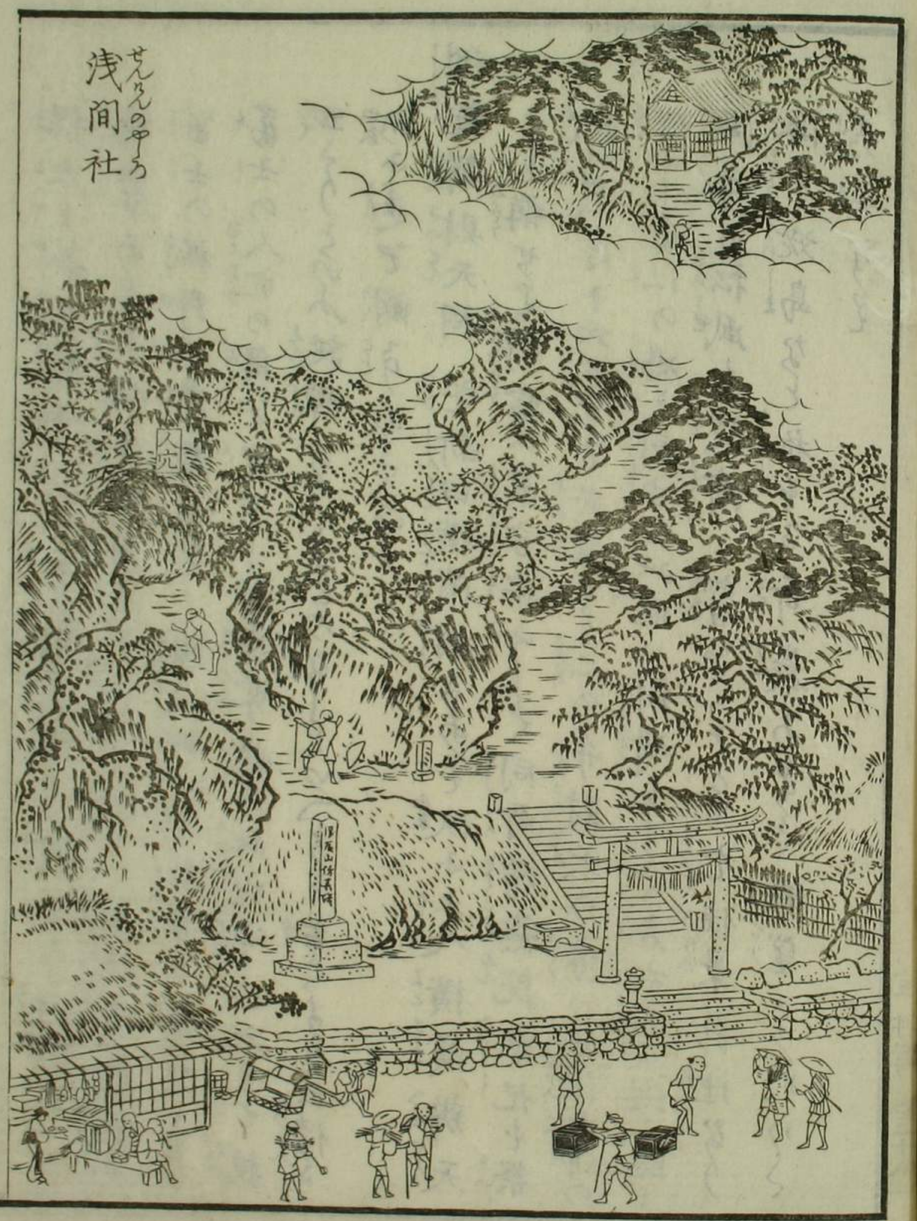
青木山西向寺　同所青木町の横小路の右側にあり　虚無僧寺に
〃〃普化宗門金洗沢と称せ　和番所と号く物か
本覚寺　切通　同所本覚寺の北の方の間を切開きく道路とも
長津田通道及三澤　永正七年の秋上杉治部少輔入道建芳ら
村等への路なり
被官上田蔵人建芳は背き此地より打く出熊野権現山を
城廓に取立西より積き〃る山くをハ其間をハ堀切本覚寺
の地蔵堂を根城とせ〃より小田原記にえ〃〃り　熊野権現
山の糸下と
青木山本覚禅寺　同所の南七軒町にあり　曹洞の禅刹にて
小机の雲松院に属せる地蔵菩薩ハ一尺四五寸の立像
なり　相伝に当寺ハ嘉禄二年の開創〃〃〃其後天文紀元
の年曹洞大源の末流季雲四傳の法孫陽廣禅師此に
住初く法幢を建て〃禅風を起せ　元禄の初殿堂門廡悉く祝融氏の為に廢せ　佛殿の
額に本覚禅寺と書せ〃る圓明寺の開祖道山和尚の
筆なり
圓明山陽光院本覚寺の南に隣る遠州可睡齋退院の地に
〃〃曹洞の禅院なり　開山敕特賜本然圓明禅師と号
石牛天梁和尚と号　後の山を福聚峰と号ひ門の額に福聚望と書
永平圓明禅師の筆なり
道灌山　同所西の方七山中の字なり　昔大田道灌入道此地に
城を構へ〃〃より〃の号ありと云
飯綱権現社　神奈川臺町海道の右の山上にあり　本覚寺より
一町斗南にあり　別當ハ真言宗同所の萬年山普門寺　奉祀せ
祭礼ハ五月十七日なり　飯綱権現本地佛も不動明王行基
大士の作や〃〃座像一尺七八寸　垂跡ハ大山祇命とい〃伝
右大将頼朝卿此る像を深く崇敬なし〃〃治承四年

八月伊豆國石橋山敗軍の後安房國へ渡海の時本望の
霊示よりく風浪の難を逃れ其後竟に天下一統なり
あひしうハ文治年間此地に宮社造営ありく神領等を寄
らるゝ事なり遥の後大田道灌此地に詣て尤も信厚
かりしと云

袖の浦　此地の光景長汀曲浦さながら袖の形に似たるに名
とも烏丸大納言光廣卿関東下向の頃帰路に再此地に
よきりあひく和歌を詠せらる其時みなく深く詠草ハ此地
江戸屋何某の家に秘め置り

こゝに袖の浦に泊まりく
見ひきも神の御派をかへるこゝふ桜を重ねしとハ　光廣
桜に黄葉集に初五文字をあらまちのとあるく結句のとゝをとやとす黄
巣集もおなじく倩写のあやまりなるべし

冨士浅間祠　同所の南芝生村海道の右の方山の中腹にあり



保土ヶ谷天徳寺といふる真言寺の持なり此地に一の
暗窟あり上俗是を富士の人穴と号く相傳昔頼朝卿
富士の裾野に御猟あり〜頃仁田四郎忠常に命せられ
富士の人穴の奥を究やむ忠常後に此穴中に入りて技
をつくすといふ誕譚ありとなり古くより云傳る
加に是を闕すあらいなす
洲乾辨財天祠　芒新田横濱村にあり故に土人横濱辨天
とも稱せり別當は真言宗ゆゑに同所増徳院奉祀を祭
礼は十一月十六日なり安置せる所の弁財天の像は弘法大師の
作ゆゑに江の嶋と同木にして此地は洲崎ゆゑに左右共に海に臨み
海岸の松風を波濤に響をうつして尤佳景の地なり
海中嶋島なと拓ける奇巖あるに眺望すべし
秀美なり